いちごいちえとひめしあい

安酉　鵺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いちごいちえとひめしあい

【Ｎコード】
Ｎ８６４０Ｖ

【作者名】
安酉　鵺

【あらすじ】
ピアプロにて、イラストあり
ｈｔｔｐ：／／ｐｉａｐｒｏ．ｊｐ／ｓａｉｈｉｔｅｉ

1．コップと麦茶

満員電車に揺られて、駅から少し歩いて学校に行って、授業を受けて、寄り道しつつ家に帰って。そんな平和で平凡な毎日が続くと思っていた。

「ハイハイハイ！おっかえりなさーい！」

玄関のドアを開けた瞬間に安っぽいクラッカーとキャッチセールスの様な甲高い声が飛び込んで来た。私はこの状況を即座に判断するだけの脳は持ち合わせてなかったので、一先ず無言でドアを閉めてみた。

「何で閉めるんですかー？」

頭の中を整理したいからです、と言いたいけれど言葉が出て来なかった。住人である私を差し置いて見覚えの無い女の人がきょとんとした表情で私の顔を覗き込んでいた。

「緋織ちゃん、お帰りなさ～い。」
「お母さん、この人誰？」
「心理学部の方ですって、学生証も本物だったし緋織ちゃんに用があるって言うから。」

毎度ながら母には警戒心や猜疑心と言った物は無いのだろうか？相手が女性だったからかも知れないけどもう少し気を付けた方が良いと思うなぁ…切実に。

「それで何の用でしょうか？」

制服のまま女性と向かい合う形でテーブルに座った。母は呑気にテーブルにコップに入ったお茶を置くとキッチンへ戻って行った。と、いきなりテーブルにバサバサとカタログの様な物が広げられた。カラフルでポップなデザインのロゴ、そして目がキラッキラしてるキャラクター絵と目が合った。

「実はですねぇ！」
「帰って下さい。」
「人の話は最後まで聞きましょうよぉ！ちゃんとバイト代も貰えますよ？」
「余計嫌な予感しかしません、直感的に嫌です、興味無いです、帰って下さい。」

カタログをぎゅうぎゅうと押し付け合う形になっていると横から間延びした声が聞こえた。

「緋織ちゃん、お話位聞いてあげなさい、わざわざ3時間も待って頂いたんだし。」

初対面の人間を3時間も家に上げないで欲しい。それにこう言う強引なタイプの人がこの母と3時間も居たのならある事無い事吹き込んで洗脳とかされていそう…。またおかしな壺を買う契約書にでもサインさせられたんじゃないだろうか？クーリングオフの手続きで役所の人と顔馴染みなんてシュール過ぎて笑えない。

「ほらほら、お母さんも言ってるんだし、見るだけ見てみましょうよ、ね？」

軽く眩暈を覚えてげんなりと椅子に座り直した。女性はうきうきと

した様子でカタログを目の前に並べて行く。ちらりと見やると『キュンキュンの嵐?!』『主人公はアナタ!』なんてロゴやらハートマークやらが散りばめられている。

「今回ウチの学部の一大研究がゲーム会社に認められたんです!あ、ゲームとか興味あります?」

「無いです。」

「この会社の『キュンてる』シリーズの最新作に心理学効果に基いたシナリオを提供する事になってですね~。」

全く私の話を聞いてない女性は、うんざりする私を他所にそれから30分位切々と語り続けていた。最早目が星屑でも見てそうな勢い。話を聞いたらさっさと追い返そうと考えていた。

「あ、そうそう、お母さんもう承諾しちゃったから。」

「えっ…?」

私は思わずコップを倒していた。

2．ダメ、轢き逃げ

母の衝撃発言から数分後、私はタクシーの中に居た。詳しい説明をしたい、と言う言葉に押し負ける形で…いや、むしろ聞かざるを得ない状況に追い込まれたので渋々居るんだけど。

「そんな怖い顔しなくても大丈夫ですよ?普段通りにしてれば良いんですから。」

そんな事言われたって訳も解らずゲームだバイトだのと並べられ、挙句勝手に承諾されていたのだからとても笑顔を見せる気分にはなれなかった。まるで『ドナドナ』の売られて行く牛みたい、なんて思いながら何度目かの溜息を吐いた時だった。

「うわぁっ?!」

運転手の変な声と共に車にドンッと重い衝撃と振動が走った。咄嗟に最悪の状況がぐるぐると回った。放心していると、あろう事か運転手はハンドルを回し今にも発進しようとしていた。

「な、何してるんですか?!」
「う、うわぁああっ?!俺じゃない!!」

いや、貴方ですよ…と内心ツッコミを入れつつドアを開けて車外へ出ると、数人の人が倒れた男の人を囲んでいた。血飛沫が飛び散ってる凄惨な光景じゃなくて少しホッとしたけど、男の人は腕を押さえたまま蹲って顔を歪めていた。多分骨とか折れてるんだろうな…私じゃないけどごめんなさい。立ち竦んでいると後ろからグイッと押しのけられて、蹲る男の人に女の子が駆け寄った。

「志揮兄！大丈夫？！」
「無理…。」

妹さんかな？と思いながら見ていると、その子は私と目が合うなり苛立った様に言った。

「アンタ等何ボケッと見てんだよ？！誰か救急車！それから警察！オイそこのオッサン！
バックレようとか思ってんなよ？！」

指差した方向には明らかに汗びっしょりな運転手が居た。ありがとう、逃げられると正直私も困る所だった。警察と救急車を呼んでいると、素っ頓狂な声が響いた。

「あああああぁぁぁ――――？！ななな…七海さん？！私の一押しカリスマ美容師キャラがぁああ！！！」

女性の叫びで周りの空気がかなり微妙な物になった。一時的とは言えこの人の関係者なのが辛い。動揺しているのかそれとも別の理由なのか、女性は涙目で男の人に駆け寄る。

「あははは…ごめんなさい、腕やっちゃいました。」
「みたいですねぇ…どうしましょう？」
「おいオバサン！志揮兄怪我してんのに何訳解んない事言ってんだよ？！」

可愛いのに言葉乱暴だなぁ、勿体無い。それに何だかまた嫌な予感がする…。お願い、当たらないで。

「拓十、オバサンは失礼だよ」
「たくと…あ、もしかしてこの子、この前言ってた甥っ子さんかしら？」
「ええ…兄の末っ子の拓十です。」
「良いわ！じゃあ君代役って事で宜しく！詳しい話はこれからだから一緒に行きましょう！」
「俺に触るな！」

微妙な空気を更に異様な物にする会話内容が繰り広げられる中、私の脳はやっと言葉を理解して密かに驚いていた。

「あの子男の子だったんだ…。」

3．ヘタレトマト

救急車やら警察やらが来た後、私とさっきの男の子、七海さんは広々とした会社の廊下を歩いていた。制服が場違いな気がして凄く居心地悪い。時々チラチラ振り返る人も居るし、ひそひそ声も聞こえる。そんな重い空気の中、前を歩いていた女性がエレベーターホールで立ち止まった。

「二人共暗いですよー？お通夜じゃないんですから！ホラホラ、いっそ手とか繋いじゃっても！」

強引に手を引っ張られて触れた瞬間、弾くみたいに手を払われた。びっくりして横を見ると七海さんはトマトみたいに真っ赤な顔をしていた。

「…ヘッタレ～…。」
「…んだと？！」

今時手が触れた位で此処まで動揺する人も珍しいでしょうに、自覚無いのかな？それとも苦手とか？と、ばつ悪そうにこっちを睨んでから、ぷいと目を逸らして呟いた。

「手前ェみてぇな尻軽と一緒にすんな、大体…ごふっ？！」

言い切る前に手が出ていた。正確には平手じゃなくて拳が。

「何すんだよ？！凶暴な！」
「私尻軽じゃないもの。」
「知るか！…あー…痛ってぇ…。」

認定、コイツ敵。顎をさすりながらぶつぶつとこぼす姿を見ながらそんな公式が頭の中に出来上がっていた。

私は金髪が目立つ事もあってか小さい頃からおかしな人によく遭って来た。中学に入って胸が大きくなってからはそこに痴漢の類もプラスされた。最初は怖くて仕方なかったけど、周りの勧めで武道を習ってからは反撃する様になっていた。それでも平気な訳じゃなくて、むしろ触られる度、遊んでるとか言われる度に嫌悪感だけ増して行った。

「喧嘩は良くないですよ？これから恋をするかも知れない相手なんですから。」

この人の唐突さには慣れた…つもりだったけど。私の脳はまだまだ驚く余白があったらしい。

「無理です。」
「おい、失礼過ぎるだろ。」
「だって初対面で尻軽呼ばわりするヘタレにどうやって恋しろって言うの？」
「真顔で俺を全否定するな！」
「じゃあ、貴方私に恋出来る？」
「ぐっ…？！」

見る間に耳まで赤くなって顔ごと逸らした。何だか私が苛めてるみたい…まぁ、苛めてるんだけど。何とも形容し難い空気が漂う中、こちらに近付いてくる数名の足音が聞こえた。

「おーい、佐藤女史、何やってんの？こんな所で。」

「甘酸っぱい二人を見学中～、あ、そっちも合流出来たの？」
「うん、この子達で最後。大人組はもう説明終わってるしね。」

やり取りからして、私達と同じ状況の人がまだ居るんだろうか？と後ろに隠れてる人達を覗き込んだ。

「ひお…？」
「え？」
「わぁ～ん！ひおだぁ～～～！！！」
「しふぉん？！」

涙声で飛び付いて来たのは意外にも、今日も学校で会った筈の友達だった。

4．銀の様な、緑の様な

涙声で飛びついて来た友達、桜華しふぉんとは同じ家庭科部の友達だ。おっとりしてて可愛くて…でも大人しいもんだから直ぐナンパとか痴漢とか、一度誘拐されそうになった事もある。

「しふぉんにまで何したんですか?!」

「人聞き悪いな、君と同じだよ。佐藤女史から何も聞いてない?新作ゲームのデータモデルだって。」

正直あのキラキラ目のパンフレットを見せられてからこの女性の話は殆ど右から左に流していた。少し迷ったけど、話を聞いてなかったのは私の落ち度よね…。

「…すみません。話あまり聞いてませんでした…。」

そう言って私が頭を下げると、目の前にふっと影が落ちて大きな手がくしゃくしゃ私の頭を撫でた。顔を上げると銀の様な緑の様な、不思議な色の髪が目に飛び込んで来た。その色に思わず一歩後ずさると同時にエレベーターの扉が開いた。乗り込んだエレベーターは外が見える形の物で、すっかり暗くなった外には夜景が光っていた。

「綺麗〜、ね、ひお、見て見て。」

「本当だ…綺麗…。」

横を見るとその人はもう手にしたファイルか何かをパラパラと眺めていた。私は何が書いてるのか解らず頭の中に『?』が一杯浮かんでいた。さっきはびっくりしたけど改めて見直すと凄い髪の色。緑っぽい銀色と言うか宝石みたいな色。…ウィッグかな?

「痛っ…?!えっ…?!」
「あ…す、すいません!」

ついつい好奇心で引っ張ってみたけどヅラじゃなかったみたい…染めてるのかぁ…。と、エレベータが音と共に止まってゆっくり扉が開いた。皆に続いて出ようとすると髪にツンと引っ張られる感覚があった。何かに引っかかったのかな?

「え…?」

振り向いた時

「無防備だね。」

今にも触れそうな距離で

「それと無自覚。」

獲物を見付けた獣みたいな目で

「…楽しみ…。」

彼は絡み取った私の髪に口付けた。

「ひーおー？」

「い…今行く！」

大声で返事をして、大袈裟に振り払って、混乱した頭をリセットするみたいに走った。

5．遠慮なく？

会議室と思われる広い部屋で私達は書類の束を配られた。あのキラキラ目の絵やロゴは見当たらず、空と街の写真の上に『∞』のマークが描かれていた。と、ホワイトボードに女性…佐藤さんがキュッとペンを走らせた。

「キュンてみよう！」

眩暈と頭痛が脱力感が倍になった。七海さんも溜息を吐いてがっくりと…むしろげんなりとしている。そんな中目を輝かせながらしふぉんは言った。

「へぇ～何か面白そうだね、ひお。」

そんな純粋な笑顔で聞かれても正直困る。私は何とも言えず苦笑いで首を傾げるのが精一杯だった。すると後ろからぬっと手が伸びて、私としふぉんの書類をペラリと捲った。

「佐藤女史の説明だと解んないだろうから、ここ、ちゃんと読んで。」

「はぁい。」

「は…はぁ…。」

しふぉんが居るから、かろうじて手は止まったけど、実は引っ叩きたい衝動に駆られていた。この人いちいち近い！そして何で私達の後ろに居るの?！恐る々々振り返る。壁にもたれたまま立ってこっちを見ている。目が合うと少し笑う…さっきからその繰り返し。私は聞こえない様にひそめた声でしふぉんに話し掛ける。

「ね、しふぉん、あの人何？一緒に来たよね？知り合い？」
「ううん、今日が初対面。心理学部の学生証とか名刺とかちゃんと見せてくれたし。説明も凄く丁寧だったよ。」
「う～ん…。」
「でもちょっと楽しみじゃない？だって、お姫様扱いして貰えるんでしょ？」
「えっ？何それ？」

聞き慣れない単語に思わず声が大きくなってしまい、周りの眉目が集中する。ホワイトボードに何やら色々書き殴っていた佐藤さんは、私を見て実に嬉しそうな笑顔を見せてこう言った。

「そうですよ～？お姫様ですから。大変だったんですよ？女の子９人と条件に合う男性９人も集めるの。」

ですから、と言われても解らないと思う。私は慌ててさっき言われた書類に目を落とした。

『つり橋効果で恋愛感情は本当に生まれるのか？』
『公衆の面前で告白したら上手く行くのか？』
『萌えキャラは本当に萌えるのか？』
『Ｔｗｉｔｔｅｒでイベント・台詞を一般募集予定。』

言葉が出なくて口をぱくぱくさせていた私に、畳み掛ける一言が投げられた。

「そこの輝詞（カガシ）君もメンバーだから。遠慮なくキュンキュンってね？」

…お母さんのバカ…私は初めて本気でそう思った。

6．長期でした

たっぷりと説明を聞かされ、色々未知の知識を植え付けられて、私は半分ヤケになって居た。何度目になるのか書類の中にある『ルールブック』を見直す。

・『∞』データテスト参加者はその証明として、各自に指定されたコードネームの入った鍵を持つ事

・テスト参加者は社から提供されたｔｗｉｔｔｅｒアカウントを使用する事（既に個人アカウントを持っている場合はどちらも使用可能）

・テスト内に置いて『ＣＰ』と呼ばれるポイントを設定、出題される『イベント』を成立させる事でＵＰ

・定期的に出題される『イベント』は、ｔｗｉｔｔｅｒ上に『成立確認』と打ち込める証人が居なければ
　イベント成立と見做されない

・『イベント』を放棄する場合定められたＣＰを没収、ＣＰが足りない場合の放棄は原則として不可

「ちょっと、質問なんだけど。」

眉間に皺を寄せた七海さんが口を開いた。

「この『イベント』って、相手決まってんの？」
「決まっている場合もありますが、参加者の誰かであれば問題無いですよ？ほら、同性に告ったりとかも最近は需要ありますし。」
七海さんは何か言いたげな顔でふるふると拳を握り締めていた。敵認定したけど今だけ握手しに行きたい気分、そりゃもうガッチリと。
「期限はリコリス祭までですのでじっくり楽しんで下さい。」
佐藤さんの口から『リコリス祭』と言う言葉が出て、楽しそうにしていたしふぉんも流石にギョッとして顔を上げた。それもそうだろう『リコリス祭』は私達が通う聖リコリス学園の一大イベント。大学部も合わせたかなり大規模な学園祭みたいな物だ。お祭り自体は凄く楽しみなんだけど、問題はその開催時期だった。
「ふざけんなよ！リコリス祭って４月じゃねぇかよ！半年もバカやれってのかよ？！」
「恋は一両日中には芽生えませんよ？」
「あの…これテストですよね？」
「……。」
「ちょ…目を逸らさないで下さい！」
明らかに明後日の方向を見る佐藤さんをゆさゆさしてみた。焦る私達を見ながらしふぉんはけろっとして言い放った。
「つまり～半年間ラブラブごっこ？」
「「冗談じゃないっ！！！」」
「あははは、君等仲良いね。」
敵認定解除しようかなぁ…むしろ今は佐藤さん達が敵な気分だから。

7．フラッシュバック

送ってくれる車に乗ってる間、私はずっと上の空だった。七海さんみたいに怒る事も、しふぉんみたいに純粋に楽しみにも出来なくて、漠然と不安を感じていた。

「それじゃ、ひおまた明日ね～。」
「あ、うん！明日ね！おやすみ。」

しふぉんが家に入るのを見届けると、自然に溜息が零れた。

「…そんなに嫌？」

余程ぼんやりしていたのだろう、運転していたのが輝詞さんだった事に私はその時始めて気が付いた。後部座席を振り返る体勢でこちらを見る目が思いの外真剣で、思わず言葉を詰まらせた。と同時に背筋がぞくりと冷えた。車の中、似ても似つかないのに、私の頭の中にねじ込まれるみたいにある光景が巻き戻って…。

「―おいっ？！」

次の瞬間には頭が真っ白になって車から逃げ出していた。後ろから何度か声が聞こえたけど、振り返りもせずただ走っていた。何処へ行きたいとか、輝詞さんは悪くないとか、そんな事を思いやれる余裕はその時の私には無かった。

「おい！待てって！急にどうした？！」

あっさり腕を捕まえられて、その手に更に私の頭はパニックになっ

た。

「や…！嫌！嫌っ！…侑俐さん！」

「侑俐…？」

手が解かれた意味も考えず、ガタガタと震える手で電話を掛けていた。

「侑俐さん…侑俐さん…！」

呼び出し音を待つのすらもどかしくて名前を呼び続けた。ほんの数秒が永遠にも感じる位長くて長くて悲鳴を上げそうなのをひたすら堪えていた。

『――もしもし？緋織？』

声を聞いた瞬間、張り詰めた糸が切れたみたいに涙が溢れた。

「侑俐さん…ゆうり…さ…！うっ…ふぇっ…！侑俐さん…！」

『――緋織？！おいどうした？！緋織？！』

心配そうな声が何度も聞こえて来て、私は電話口でただ泣きじゃくるしか出来なくなっていた。と、不意に携帯を手から奪われた。

『緋織今何処に居る？！緋織！』

「響侑俐さん…ですね？『∞』企画でお伺いした輝詞です。」

「え…？」

私から取り上げた携帯で輝詞さんは何かを話していて、私はそれをただぼんやり眺めていた。

8．屈折

＜七海拓十（ナナミタクト）＞

散々な一日だった。叔父である志揮兄が事故に遭うし、初対面の女には殴られるし、おまけに訳の解らないゲームのテストに半年間も巻き込まれるし、厄日としか思えなかった。まぁ報酬くれるって言ってたし、せいぜい志揮兄のお見舞いにでも使わせて貰えば良いか。

「帰るか…。」

立ち寄ったコンビニでもいまいちスッキリせず、適当な飲み物だけ買って家路に付いていた。少し暗い路地に差し掛かった時だった。

「…い！おいっ…？！待て！」

二人分の足音と、少し怒鳴る様な男の声。痴話喧嘩って解釈するには少々穏やかじゃない。見失わない様に、見付からない様に後を追うと、公園の手前でその影が止まった。

「おい！待てって！急にどうした？！」

「や…！嫌！嫌っ！…侑俐さん！」

「侑俐…？」

俺は声の主達に少し驚いていた。さっきまで見ていた金色の髪とシルバーグリーンの髪。あんな目立つ奴等早々忘れないし見間違えもしない。けど、明らかに女の様子がおかしかった。俺を殴ったり説

明する女に突っ掛かってた時の気の強さなんて微塵も感じなくて、子犬みたいにブルブル震えて泣きながら電話をしていた。

「侑俐さん…侑俐さん…！」

怯え切って泣きじゃくる姿を見ていられなくて、もう少しで飛び出して行きそうになった。と、落ち着き払った声が聞こえた。

「響侑俐さん…ですね？『∞』企画でお伺いした輝詞です。」

「え…？」

泣き止んだ女は淡々とした会話をボーッとした顔で聞いていた。何を話しているのかはよく聞こえなかったが、少しすると男は電話が返すのが見えた。少し落ち着いたのか、呼び掛けに頷いてる。やがて促される様に公園のベンチに頼りなさ気に座った。出て行く訳にもいかず、かと言って立ち去るには少し気が引けて、物音を立てない様に様子を伺っていた。１０分位経っただろうか、公園にそぐわない車が一台止まったかと思うと、長身の男が下りて来た。

「…緋織…？緋織！」

少し控えた声に吸い寄せられるみたいにふらふらと金色の髪が揺れた。

「侑俐さん…。」

街灯に照らされ薄っすら光る髪と、まだ少し涙が滲む顔と、やっとで掴んだであろう手は未だ微かに震えていた。

「ごめんなさい…。」

その姿に言い知れない想いが騒いだ。あの女があの顔で俺を見たら一体どれだけ良い気分だろう…って。

9．何か間違っていませんか？

チャイムの音と共に今日の授業が終わった。昨日は随分色々あって、侑俐さんにも迷惑掛けてしまった。今度ちゃんと謝ろう、そう考えていた時だった。

「ひおー、呼んでるよー？」
「へっ？！私？！」

急に名前を呼ばれて教室の出入口に顔を向けると、憮然とした顔で制服を着た七海さんが居た。私…いや、私達が通う『聖リコリス学園』は中等部、高等部、大学、大学院とあり、専門学科も含めるとかなりの人数の生徒がいる。

「お、同じ学校だったんだ…。」
「学部違えば会わない奴の方が多いだろ。」
「まぁ、そうなんだけど…。」
「…何でそんなに距離を取るんだよ？！」

だってアンタ私の中でまだ敵だし？とも言えずほぼ廊下を挟んで真反対に位置取っていた。それにしても一体何の用だろう、とチラリと顔を伺うと、思い出した様に携帯をいじり始めた。と、いきなりずいっと画像を突きつけられた。

「これ、どうな訳？」
「え？」

改めて画像に視線を移して、私は固まった。そこには泣きながら袖を掴む私と、私の頭を撫でる形の侑俐さんが映っていた。どう考え

ても明らかに昨日の私達…！

「この兄さんどう見たって普通のリーマンじゃないだろ。高校生がホスト遊びとかヤバいんじゃね？」

「侑俐さんは…！」

言おうとして言葉に詰まった。侑俐さんの事情は私が勝手に話して良い事じゃないし、何より七海さんに諸事情とか知られたくない。

「えーと、そう！お兄ちゃんみたいな…！」

「兄妹でこんな事してたらそれはそれで問題あると思うけど…。」

我ながら苦しい言い訳にあっさりツッコミが入った。誤魔化すにも写真撮られてるし…はっ！いっそ携帯を取り上げて壊せば解決！

「家のＰＣにデータ移してあるからな？」

「ハゲろ、チビ。」

「あぁ？！」

悪態を付きつつふと思った。そもそも七海さんは何をしに来たんだろう？もしかして写真見せて脅迫？！でも私お金とか持ってないし、単にホスト遊びを止めなさいって忠告…にしては穏やかじゃないよね？って事は例のゲーム関連とか？

「あああ！解ったしふぉん狙うつもりね？！」

「何でそうなるんだよ？！」

「最っ低～～！！あの子が純粋なのに付け込んで私を脅迫してあんな事とかこんな事とかするつもりでしょ？！変態！」

この時私は頭に血が上っていた。だから売り言葉に買い言葉と言う

か、勢い余って私は変な事を口走ってしまったんだろう。

「私が王子様になってでもしふぉんに変な事させないんだから！」

呆れ顔の七海さんと私の耳に電子音が聞こえた。二人して音のした方を向くとデジカメを持った三年生が立っていた。

「グレーテルちゃん百合宣言…良きかな、良きかな。」

１０．実に、笑顔で

長い黒髪にデジカメを持った女の子、リボンの色からして三年生。
実に、笑顔。

「あの…？」
「初めまして、グレーテルちゃんにウサギ君。」

意味が解らずちょっと怖い、いや、かなり怖い。七海さんも同じ思いなのか微妙に引いているのが感じ取れた。少し間があってから、その先輩は眉間に皺を寄せて首を傾げてからメモを取り出して私達とメモとを交互に見遣る。

「あれ？違った？名簿の顔と名前は一致してるのになぁ…。」
「名簿？」
「うん、『∞』の参加者とコードネーム名簿。説明の時２０枚位あったから全部貰って来ちゃった。」

記憶が確かなら確か参加者は男女９名ずつで１８名、そしてメモを全部持って行ったと言う事は…。

「それ私達の分じゃないですか？」
「ん？んん～～？おぉ！なるほど！言われればこんなに要らないかも。はい、じゃあ一枚どうぞ。」

笑顔でメモを渡されたけど目を逸らして失笑するしか出来なかった。男だったら殴ってたかも。溜息を吐いてから渡されたメモに目をやると、顔が判る写真と名前、学校、年齢、ゲーム内でのコードネームと言う項目が書かれていた。これってプライバシーの侵害じゃな

いんだろうか？

「サイトやｔｗｉｔｔｅｒはコードネームと顔写真だけだったからまぁ大丈夫かな。」

「ちょっと待って。」

ツッコミがシンクロしてしまった。ｔｗｉｔｔｅｒの話は聞いていたけど、サイトは初耳だった。

「サイトって何ですか？！」

「サイトとはウェブサイトの略称でインターネット上で、様々な情報を提供する…。」

「単語の意味じゃねぇよ！」

「貰った名簿に書いてあるじゃない、ほらほら、ここ。」

名簿貰ったのさっきですから。と言うツッコミは最早彗星の如く流し書いてあるアドレスに飛んでみた。と、そこには説明の時と同じ空の絵とシンプルなロゴのホームページが出て来た。何だかもう見るのが怖くなって来たが、意を決して中を見てみる事にした。

『ハァイ！ボクきゅんえもん！『∞』へようこそ！このゲームは現在厳正なるアミダくじに寄って選ばれた９対９の男女によってリアルシュミレーション中のゲームだよ！ｔｗｉｔｔｅｒの投票で言って欲しいキュン☆ワードや、やって貰いたいキュン☆シチュを随時募集中！みなぎって参加してね！』

「可愛いよね～きゅんえもん！…あれ？二人共どうしたの？まるで漫画みたいにがっくりして。」

「頭痛い…てか厳正なるアミダくじって何だよ…。」

「…私も頭痛い…。」

画面に現れた地球外生命体と書かれている単語に色々気力が奪われた。

「医務室行く?カウンセラーの館林先生も参加者だし丁度良いかも。」

「教員まで毒されてんのかよ?!」

名簿を見直すと確かにスクールカウンセラーの先生の名前があった。そして目の前にいるこの妙な先輩の名前と写真も。

「あれ?え?!先輩も参加者…と言うか殆どウチの学校の生徒じゃないですか!」

「うん、だから探しに着たんだ~よろしく。」

そう言って…名簿に寄る所の赤ずきんこと鶴村先輩は手を差し出した。実に、笑顔で。

11．医務室と珈琲

私達は取り敢えず『∞』のテスト参加者を話をしてみようと言う事になり、合流したしふぉんを加えて４人で医務室へ行く事になった。この学校は生徒数が多い事もあってか校舎が広く、中等部、高等部、大学とそれぞれに医務室が設置されている。

「失礼しまー…す?!」

ドアを開けた瞬間鶴村先輩を除く私達３人は固まった。どう見てもカウンセラーの館林先生がベッドに押し倒してる…どう見ても男の人を。

「失礼しましたぁ―っ!!!!」

叫んで思い切りドアを閉めると、影と共にドアが開いた。

「おい、ベタな誤解すんな。で?何の用だ?普通科１年七海拓十、桜華しふぉん、倉式緋織、３年鶴村睦希。」

「あれ?先生どうして私達の名前知ってるんですか?私医務室来た事無いのに。」

「職業上覚えるのも仕事でね。ま、入った入った。」

先生は医務室の奥へ入ると、棚からコップを出していた。さっき押し倒されていた人はベッドで眠っている様子だった。あ、眼鏡掛けたまま寝てる、ドジな人だなぁ。

「あの人恋人ですか?」

「そこ引き摺るな、そしてカメラを構えるな、期待に応えるつもり

もそんな趣味も無い、ただの病人だ。」
「いっぺん実物見たかったんですけどねぇ…。」

鶴村先輩は何やら残念そうに、且つ不満気にデジカメを仕舞っていた。実物って何の事だろうか気になったけど怖くって聞けない、直感で踏み入れちゃいけない世界な気がする。ふわりとした香りと共にテーブルに珈琲の入ったカップが並べられた。お礼を言ってから湯気の立つ珈琲を口にする。

「美味しい…。」

思わず呟いた言葉と共にふと顔を上げると頬杖をつく先生と目が合った。一瞬間があってからクスリと笑って言った。

「そりゃどうも。それで?揃ってデータテストの話でも聞きに来た?それとも青い病?」
「あ!そうそう!先生も参加者なんですよね?ほらここ、コードネーム『ＢｒａｖｅＴａｉｌｏｒ』って…。」
「ま、可愛い子とイチャ付くだけで給料貰えるならアリじゃない?別に結婚しろって訳じゃないし。」
「そんな呑気な…。」

それから私達は先生としばらく話をしていた。データテストの話やテストの話や、正直後半は世間話になってたけど。そして話をしている内に私はある事を思い出した。頭を過ぎった不安は染みみたいにぶわぁっと広がって行って、急いで例のサイトを確認しようと携帯を取り出した時だった。

「そろそろ暗くなるから帰った方が良い、女の子は危ないから送ってく。」

先生は私の携帯をパタンと閉じて優しい声で言った。

「はーい、お世話になります。」

「七海拓十、お前は徒歩、俺の車は男乗せる場所無いから。じゃ、解散。」

「はぁ?!ちょ…?!」

文句を言い掛けた七海さんを医務室に残し私達は帰路に着いた。

12．冷や汗

いきなり理不尽に解散宣言をされて医務室にポツンと残されてしまった。実際学校からは近いので困る訳では無かったがあからさまに杜撰な扱いされるのもいい気分はしなかった。

「大丈夫なのか？お前みたいなガキで。ま、代役なんてそんなもんか。」

ベッドの軋む音と共に聞き覚えの無い声がした。入った時に寝ていた奴だった。俺より随分背が高くて悔しいが見上げる形になった。

「急に何だよ？てか、アンタ誰？」

「調理師学科の真壁鈴夢、コードネーム『ＳｗｅｅｔｓＨｏｕｓｅ』宜しくね～ボクちゃん。」

薄ら笑い且つ思いっ切り馬鹿にした口調でわしゃわしゃと頭を掻き撫でられ無性に苛立った。首を振って手を振り払うと踵を返し医務室のドアを開けた。と、背中に声が投げられた。

「あの金髪の子は気付いてたみたいだぞ？」

「はぁ…？」

金髪の子…多分に乳女…じゃない、倉式の事だろう。気付いてた？一体何の事だ？帰ろうとした足が止まっていた。憮然とした顔で向き直ると、指でちょいちょいと合図をした。ドアを閉めろと言いたいらしい。いや、普通に言えよ！

「ライオン…。」

「は？」
「ライオンが一番苦労する事って何だと思う？」
いきなりクイズ？何なんだ？馬鹿にしてるのかいちいち言い方が気に喰わない。目を逸らしたままで居るとヌッと目の前に携帯が突き出された。画面にはあのゲーム用のサイトが映し出されている。
「んなもん見せんなよ！」
「馬鹿か、よく見ろ、ほら。」
指差した場所にはサイトのアクセスカウンターがあった。と、そのスピードがまるでストップウォッチの様に上がっているのが見えた。ギョッとして数字を見ると４万を超えている。サイトが公開されたのがいつかは知らないがこんなに早く上がるのはおかしいと俺でも解った。
「ライオンが一番苦労するのは獲物を探す時だ。」
「え…？」
「１０代の、しかも皆それなりに可愛い女の子が９人も写真付き公開。言わば狼の群れの中に子羊投げ込んだも同然だな。」
「ちょ…これヤバイんじゃ？！」
「だからそう言ってんだろ。ま、カウンター上がってんのは今頃サイトハッキングでも試みてる輩が居るんじゃない？」
背筋がゾワリとした。中身はどうあれ確かに９人とも見た目は悪くない。それがこんな風にネットに出ていたら確かに善悪問わず人が寄って来る事は容易に想像出来る。
「敵さん結構狡猾だよね。これであの子等も俺等も逃げられない。何せ周りの連中皆が敵になっちゃったみたいなもんだから。」

「マジかよ…。」

暑くないのに汗が一筋落ちた。

13．落ち着きの無いテーブル

事務的な文章のメールと画像を見つつサラダを口にする。疲れているのか味がいまいち判らなくて、途中から事務的に口に詰め込んでいた。料理は美味しい筈なのに…。

「大分お疲れの様ですね、響さん。」

余程仏頂面だったのか、馴染みの店員がグラスを磨きながら静かな声で言った。

「ははは…。」

曖昧な笑いで返すと今度はプライベート用の携帯が鳴った。メールの内容にホッと息を吐く。

「お客様ですか?」

「いえ、居候先の先輩です。少し人を送って貰う様に頼んでいたので。」

「ああ、例のお姫様ですか?」

「お姫様ねぇ…。」

珈琲を飲み掛けた時、入り口の鈴の音と共にドアが開き大きな声が響いた。

「この人痴漢です!」

激しく珈琲を吹いてむせた。電車やバスの中ならいざ知らず、何故喫茶店のドアを開けてそんな台詞になるんだ?!

「私の胸鷲掴みにしたんです！誰かー！おーまわーりさーん！」
「だから違う！大体そんな曖昧なサイズの乳に用は無い！」
「品定めしてんじゃないわよ！」

余計な事を言った男の子の方が学生鞄でぶん殴られていた。いっそ清々しい光景だったが、軽く営業妨害になっていたので席を立って二人を宥める事にした。

「あの、静かに…ここ喫茶店だから。」
「オジサン誰？うっわ、怪しい！この痴漢の味方する気？！」

オジサン…俺まだ２３なんだけど…。ちょっと傷付きながら男の子の首を絞めている女の子を何とか落ち着かせ、二人を席に座らせた。

「で…えーと…彼が君の胸触ったと？」
「君じゃなくて若葉です！日向若葉！」
「天城海琴と申します。」

自己紹介されたよ…意外と礼儀正しいな。男の子学生証出してるし。

「で、どうなの？」
「この人がバスの中で私の胸掴んだんです！何か前の席座ってて、きょろきょろしてるな～って思ったらいきなり胸をガシッって！」
「俺は蚊を目で追ってたまたまそこに止まったから叩いただけです。」
「そんな言い訳が通用する訳無いでしょ！大体私の胸で蚊を潰すとは何事よ？！」

実に馬鹿馬鹿しい事になって来たな…見た所高校生だしただの青い

痴話喧嘩か。適当に聞き流して宥めて帰すか…。ぎゃんぎゃんと騒ぎ始めた二人に深く溜息を吐いた時だった。

「そもそも俺は倉式以外興味は無い！」

「倉式…？」

聞き捨てならない名前に思わず水の入ったコップを倒していた。

14．手紙

家に入ろうとした時ポストに私宛の手紙を見付けた。一通目の封筒に会社の名前と『∞』のロゴが見えてハァーッと溜息を吐いた。そして二通目…。

「え…？」

差出人の名前を見て私の心臓はドキンと跳ねた。

「あら、おかえり緋お…。」

「ただいま！」

家に入るなりお母さんの声を背中に私は階段を駆け上がり自分の部屋に飛び込んだ。まだドキドキしながら手紙をそっと見直した。

「…鷹臣さん…！」

声が震えて涙が出そうになった…嬉しくて嬉しくてきゅっと手紙を抱き締めた。旋堂鷹臣…私がちっちゃな頃からいつもお兄ちゃんみたいに守ってくれた人…優しくて、頭が良くて、何でも出来て…好きになるのに時間なんて掛からなかった。勿論私なんて全然相手にして貰えなかったけど。

「鷹臣さん…。」

ベッドに座って手紙の封を開けると、いつもみたいに何枚もの写真が見えた。真っ青な海や綺麗な街並みや、時には犬や猫の写真に思わず顔が緩む。でも鷹臣さんが写っている物はやっぱり入ってなく

て、少し寂しくもあった。

「もう3年かぁ…。」

そう、鷹臣さんは3年前、突然引っ越してしまった。それもフランスに。留学だって聞いたけどその時私は納得出来なくて、置いてきぼりにされた気がして、何日も泣き通して皆を困らせていた。メールじゃなくて、時折届く手紙と写真が何より楽しみだった。丁寧に折り畳まれた便箋をゆっくり開く。綺麗な字で、書き出しはいつも決まってて…。

「『――元気ですか?』…なんだよね～。」

ベッドにごろんと横になってウキウキした気持ちで手紙を読み進める。他愛ない出来事から色んな所に行った話、時々愚痴ったりして、私はその一つ一つに想いを馳せた。そして最後の一枚を見た時だった。

「…嘘…。」

何度も瞬きを繰り返す。

「えぇっ?!」

私はガバッと起き上がっていた。

「…8／27…。」

便箋の真ん中に一行だけの文だった。

『――8／27、日本に戻ります　鷹臣』

15．油断大敵

長い間飛行機に乗っていたせいか足元が頼りない。飛行機に何度も乗っているがこの感じは未だに慣れない。ロビーのソファに座っていると影が落ちた。座ったまま上を見ると一緒に帰国した後輩の弭（ユハ）の顔があった。

「時差ボケ大丈夫？先輩。はい、お茶。」

「悪い…。」

額に冷たい缶が当てられ少し気分が落ち着く。息を吐きつつ目を閉じていると、かなり近くで声がした。

「隙だらけな人だなぁ…。」

目を開けて片手で弭の口を押さえる。忘れてた。こいつは色々と油断出来ない奴だった。心成しか周りの、特に女性からの妙な視線を感じて居心地が悪い。

「先輩目立つから。」

「お前が妙な事するからだ。」

留学中に知り合った弭は『色々とＯＫ』な上に悪ノリしがちな性格も手伝って、一緒に居る俺はすっかり周りにゲイだと思われいた。学校で酔っ払った屈強な男の先輩に迫られたトラウマが未だに残っている。

「そう言えば、例のお姫様は？連絡したんでしょ？」

「手紙送ったけど、まぁ子供一人じゃ空港までは来れないだろ、家

に着いたら連絡するつもりだ。」

頭の中に小さな緋織の姿が過ぎった。小さい頃金色の髪をからかわれてよく泣いていた。同じ金色の髪が嬉しかったのか、初めて会った時から凄く懐いていた。泣き虫で小さくて『お兄ちゃん』と呼んでは、いつも俺の後をひよこみたいに着いて来ていた。最後に見たのは緋織が中学に上がる頃だったか。

「でもその子今16歳でしょ？女の子って変わるから。綺麗になってびっくりするんじゃない？」

「何言ってんだ。」

笑いながらスーツケースを引いて人がざわめく中を歩いていた時だった。人が一方向をちらちらと振り返っては何かを話している。空港だし芸能人でも居たんだろうか？

「…さん…！鷹……ん…！」

「先輩、何か呼ばれてません？」

「え？」

「――鷹臣さんっ！」

響いた声に振り返ると、下を向いたままゼイゼイと息を切らせた様子の金色の髪の女の子が居た。

「…緋織…？」

「鷹臣さん！」

嬉しそうな声と共に緋織が腕の中に飛び込んで来た。

「…おかえりなさい…！」

頭の中が真っ白になっていた。記憶の中の小さな緋織と、ほんの一瞬見えた笑顔が焼き付いて離れなくて。放心したまま腕の中の緋織を抱き返して何とか言葉を発した。

「ただいま…。」

16．頼りない

人の足音だけが聞こえるフロアを黙々と掃除していた。まだ人気の無いライブハウスって、何だか味気無い。テーブルを拭いていると双子の弟、カオスが私に声を掛けた。

「カシス、何か呼んでるよ。」
「私？」
「うん。余所のバンドのメンバー？」

覚えが無いので首を傾げつつ裏口に行ってみると、緑掛かった銀髪が見えた。確かゲームのデータテストの話をしに来た心理学部の人。確かにこんな髪と格好じゃバンドのメンバーに間違えられるのも納得。えーっと…何だっけ？名前…。

「ヒヨン君？」
「飛猿（ヒエン）です。」
「あ、うん、それ、飛猿君。」
「…例のテストの名簿を一人が持ち帰ってしまっていたと報告があったので渡しに来ました。」

そう言うと飛猿君は封筒を一部手渡して来た。一応確認を促されたので中を確認すると、参加者の顔写真と簡単なプロフィールが載った名簿が入っていた。本当プライバシーの侵害よね、うん。名簿に目を通している途中で私はふと気付いた。

「ねぇ、この子…えっと、倉式…緋織。」
「彼女が何か？」

このライブハウスには高校生も時々紛れ込んでいる。聞き耳こそ立ててはいないがさり気に耳に入る会話はある。確か4月頃だったか、ライブハウスの入り口で彼女が絡まれていたのを思い出した。金髪だった事もあって目立っていたので当然と言えば当然なんだけど…。

「男4人をトンファーでボッコボコに倒して拍手喝采浴びてたわね。」

ちょっとした映画のワンシーンの如く大の男4人が見る間に泡を吹いて倒れて行ったので忘れるにも忘れられない。と、飛猿君は頭を掻きながら少し間を置いて言った。

「選考理由は俺の管轄外なので。佐藤女史曰く『メインヒロインは濃い』だとか、『男の影が多い方が良い』とか言ってましたね。」

確かにこれだけ目立ってキャラの濃い子ならゲームとしても面白いかも知れないけど、危なくないのかしら?最近じゃネットストーカーなんてのも居るし。何か私も怖くなって来ちゃったな…。

「ねぇ、これ大丈…。」

「大丈夫ですよ。」

遮ってキッパリと言われた。何?この自信満々っぷり、腕っ節に自信があるのか、それとも私には変なのが寄って来ないとでも言いたいのかしら?怒って良いのかときめいて良いのかつくづく読めない…むしろ苛々するかも。

「…多分。」

「頼りない!」

ヤダ、私芸人でもないのにツッコミ入れちゃった。

17．両手にバッグ

数日前、家に何だかとってもテンションの高い女の人がやって来た。何でも心理学部の研究とゲームがどうとかで、最後の方は『萌え』とか『キュン』とか言ってたからあんまり聞いてなかったけど、どうやら私はその新しいゲームのテストプレイヤーみたいな物に選ばれたと言う事らしい。今日はテストの参加者の顔合わせをする、と通知を貰って再び会社に足を運んだ訳だけど…。

「…ねぇ、若葉さん。」
「何でしょう?彩花さん。」
「ここ、絶対違うよね?」
「うん…。」

私達は広い社内で思いっ切り迷っていた。会社の所々にある避難経路図は部屋の名前が無くて正直役に立たない。クラスメイトである若葉と一緒に来たまでは順調だったんだけどなぁ。携帯を弄りながら溜息を吐いた。

「流石に携帯地図でも会社の部屋名までは載ってないしね。」
「よし彩花!一旦下の受付まで戻って案内して貰おう!」
「そうだね、時間遅れちゃうし。」

若葉の提案に従ってエレベーターを探して歩いていた時だった。見知らぬ女の子が私達を見付けて慌てた様子で走って来た。中学生位だろうか?何故か両手にハンドバッグを持っている。

「あ、すいません!ここの会社の医務室って何処ですか?!向こうで貧血起こした人が居て…!」

女の子が指差している方向を見ると、青い顔で辛そうに俯いて座り込んでいる女の人が居た。私と若葉は顔を見合わせて具合の悪そうな人へ駆け寄った。意識ははっきりしているみたいだけど立ち上がるのは厳しそうに見える。どうして良いのか判らずおろおろしながら背中をさすった。

「すいません、私達もこの会社の人間じゃなくて…。」
「ねぇ、救急車とか呼んだ方が良いのかな？それか大声で誰か呼んでみる？」

私達が3人で相談していると少しくぐもった音が鳴った。女の子は焦りながらバッグから携帯を取り出して、勢いついでに中身を床にぶちまけた。

「あわわわわ？！いいや、後で！もしもしもし？！」
「お、落ち着いて。」

女の子の電話の相手は誰か判らなかったけど、周りにある物なんかを話しているのが聞こえた。早く誰か来てくれないかな…この人持病とかあって発作だったりしたら心配だし…。数分が凄く長く感じて緊張した空気が張り詰めていた。

「ワン！」
「…へっ？！」

思い掛けない声と足元に当たった感触に恐る恐る下を見ると、白い毛玉が目に入った。

「ひゃあああっ？！何？！何？！何？！」

「わたあめーわたあめ…あ、そっちに居たか。」

何だかとっても怪しいお兄さん来たし…いや、それ以前に何で犬がここに…。開いた口が暫く塞がらなかった。

18．慣れてる

最近私疫病神か何かに取り憑かれているんじゃないかな？変なデータテストに巻き込まれるし、痴漢には遭うし、知らない場所で急病人に会うし…。

「若葉ー。」
「ワンワン！」

何故か生きてる犬を抱いて彩花が戻って来た。えっ？！犬？！何処から犬なんて連れて来たの？！流石彩花！やる事が違うわ！…って、いけないいけない、これはツッコむべき所よね…。

「彩花！借りるなら猫の手よ！」
「ち、違うよぉ！えっと、この人が…！」

え？誤解？ヤダ彩花ったら紛らわしくも高度な技を…。ん？あの怪しいポニーテールは…。

「スペシャルワッフルプレートキャラメルてんこ盛り奢ってくれたホストの兄さん！」
「…響です。」

そうそう、響さん、うん、覚えた。…あれ？何か忘れてる様な気が？はっ！そうよ病人！

「響さん！ワッフルの話なんかしてる場合じゃないわよ！病人が！」

振り返ると、もう響さんは具合悪そうな人を看ていた。私も取り敢

えず様子を見た方が良いよね…。響さんは手首を押さえたり額に手を当てたりしていた。

「大丈夫そうですか？」

「ん～多分貧血…んーと…ちょっと、ごめんね。」

一瞬この人にキスするのかと思ってしまった。彩花の肩からそっと奪うみたいに抱き寄せて、左手を背中に回した。

「ちょっ？！何して…？！」

「膝貸してあげて、頭低くしないといけないから。良い？」

「は、はい！」

膝枕する体勢の彩花に確認すると、中学生の子と一緒にハンカチを濡らしに洗面所へ行ってしまった。何故か犬も一緒に。それにしてもテキパキしてたなぁ…あ、そっか！ホストだし酔っ払いの介抱とか慣れてるのかも？と、彩花がほっとした様に口を開いた。

「良かったね、私達じゃ対応出来なかったし…。」

「本当にすみません…迷惑掛けて。」

膝枕体勢の女の人は青い顔で私達に軽く会釈をした。私はふとさっきの事が気になってしまった。

「あのー…さっき響さん何してたんですか？こう、背中に手をやって…。」

そこまで聞くと女の人が急に困った顔で目を泳がせて、躊躇いがちに小さい声で言った。

「えっと…その…あの人服の上から私のブラのホック外したみたいで…。」

「えぇ?!何それ最低!!痴漢行為じゃないの!!」

「若葉、応急手当としては正しいから。」

理由はどうあれ変態行為!やっぱり男は狼なのね!気を付けなきゃ!

19．理想の大人

時計の音が静かに響く中、机に突っ伏したまま隣のひおが転寝を始めてしまった。揺らして起こしてみたけど全然起きる気配が無い。聞いた話では幼馴染のお兄ちゃんが3年振りに帰って来て、昨日は嬉しくて殆ど眠れなかったんだとか。

「大丈夫？具合でも悪いの？」

ひおが起きないので心配したのか、斜め前に座っていた人が心配そうにこちらにやって来た。リボンがいっぱいの桜色のジャケット、何だかお花がそのまま人になったらこんな感じかも？

「平気ですよ、ひお…えーと、緋織は寝不足なだけなんですよ。困った子ですよね？」

「緋織ちゃんって言うの？代わった名前なのね。」

「何か漢字の名前って和風！って気がしますよね？私の名前なんか平仮名で『しふぉん』なんですよ？」

「素敵じゃない、美味しそうで。ピッタリだと思うわ。」

砂糖菓子みたいな笑顔で誉められて何だか私が照れてしまった。珍しい名前って言われた事はあるけどそんな風に言って貰えて素直に嬉しくなった。そう言えばこの人、この部屋に居るって事は同じテストの参加者って事だよね？

「あのっ…！さ、参加者なんでしゅか？！」

緊張してつい声が上ずってしまった…自分の耳に届いた言葉で恥ずかしくて居た堪れない。赤ちゃん言葉になっちゃったよぉ～！走っ

て逃げたい１５歳、しふぉんは今日も元気です…。

「瀬乃原彩矢と申します。宜しく、しふぉんちゃん。」

私は真っ赤になって俯いてしまった。もう色々と顔から湯気が上がりそう。彩矢さんかぁ…良いなぁ、落ち着いてて大人～って感じがする。

「しーふぉんちゃん！」

「あ！鶴村先輩！」

知っている先輩の顔を見て少しだけホッとする。一応名簿に目は通したけど、性格までは載ってないし、先生とか以外は知らない人ばっかりだったもんなぁ…。憂鬱な溜息を吐く私を余所に鶴村先輩は彩矢さんともすぐに仲良くなっていた。と言うより、彩矢さんが鶴村先輩のペースに巻き込まれてるっぽいかも。ひおと言い先輩と言い、誰とでもすぐ話せるのは正直羨ましい。知らない人だとどうしても上手く言葉が出て来ない。男の人なんて尚更だった。こんなんで大丈夫かな?私…。二度目の溜息を吐いた時だった。

「…緋織、寝てるのか?風邪引くぞ?」

後ろから伸びた手がひおの肩を揺らした。何の気無しに振り返った私は、意外過ぎる光景に思わず椅子から転げ落ちそうになっていた。声に顔を向けた2人もそれは同じだったみたいで3人がガタッと椅子を鳴らしていた。ひおを起こそうとした人は私達が一斉に飛び退いたので何やらやり場の無い手を彷徨わせた後、再びひおを起こそうとその肩に落ち着いた。

「あ、あーゆーすぴーくじゃぱにーず?!」

「心配しなくてもれっきとした日本人だから…。」
「お、おーらい…じゃなかった、理解しました！」

ごめんなさい、そんな背が高くてそんな金髪ロングじゃ私も外国人かと思ってました。

20．トマトに進化

ゆさゆさと肩を揺らされてぼんやりと目を開ける、けどまだまぶたは仲良くしたがっていてとろとろと目を瞑る。おやすみなさい、世界。…ん?何だろう?何か凄く良い匂いがする。爽やかなミントの香りの中にビターチョコの香ばしさが…。

「はい、あーん。」
「あむっ。」

口の中に爽やかな甘さがほわりと広がった。はぁ～至福の時～…って、あれ?私何でチョコ食べてるの?

「美味しかった?ひおちゃん。」
「ひゃわっ?!とっ…?!きゃあっ?!」

一気に目が覚めて、反射的に思い切り飛び退いた。と、その拍子に私は椅子から落ちていた。隣に座っていた筈のしふぉんの足が目の前にある。何人かの焦った様子の声が上から聞こえた。すぐに起き上がろうとしたけど、驚いたのと椅子から落ちたのとついでに寝ぼけていたせいか、体が言う事を聞かなくて転んだまま呆然としていた。

「大丈夫か?緋織。」

覚えのある声に顔を上げると、金色の髪が見えた。

「た…鷹臣さ…?!わっ?!」

何で此処に?と聞く前に私の体は軽々と抱き上げられ宙に浮いていた。息が掛かりそうな距離に鷹臣さんの顔がある。

「何処かぶつけた?眩暈や吐き気は?」

顔がかぁっと熱くなって、言葉が出なくて口をぱくぱくさせて、多分今の私金魚みたいになってるんだろう。心臓が飛び出しそうな位バクバク打ってて、聞こえそうで怖い。

「リアル姫抱っこ良きかな、良きかな。そろそろ緋織ちゃん完熟トマトに進化中、っと。」

「トマト?」

「あああああ、あのっ!だ、い…じょうぶ…なので…下ろ…して…!」

やっとの思いで言葉を口にすると、鷹臣さんは私をそっと椅子に降ろして、何時の間にやら写真を撮っていた鶴村先輩からデジカメを取り上げてデータを削除していた。顔から熱が引かなくて、心臓が倍位の速さで、手で頬を隠した。

「チョコに酒は入ってない筈だけど?」

聞き慣れない声に落ち着かないまま振り返ると、私にチョコを食べさせたであろう人が頬杖を付いてクスクス笑いながら見ていた。チョコ細工みたいな髪と瞳、それに眼鏡。…あれ?この人…何処かで…。記憶を辿って、確証の無いまま聞いていた。

「医務室で寝てた…人?」

「お、正解。ご褒美にチョコもう1個あげよう。」

眼鏡の人はポケットから小さな包みに入ったチョコトリュフを私の前に差し出した。

「『Ｄｅｌｉｃｉｏｕｓ Ｆｏｒｅｓｔ』新作、ミントとチョコのコラボな美味しさ『キュートなハリネズミ』さっきの１個とそれ合わせて１５０円ね。」

「お金取る気ですか？」

満面の笑みで当然と言わんばかりに手を出していた。よく知らないけど取り敢えずこの人最低だと確信していた。

21．それはあまりに唐突に

打ち解けているんだかいないんだか微妙なやり取りで予定されていた時間を15分程過ぎた所へ数人の女の子が姿を見せた。どうやら1人が体調を崩して休んでいたとの事。室内を見回すと女の子9人に対して男の人は3人しか居ない。あの銀緑頭の人も今日は顔を見ていなかった。

「ねぇ、他の人は――…。」

そう言い掛けた時、後ろにある扉から侑俐さんが入って来た。顔でも洗って来たのか髪が少し濡れている。

「侑俐さん…。」

「ん？」

侑俐さんは自分の事をあまり話さない。弱音も愚痴も私の前では言った事が無い。だけど仕事でいつも忙しい事は知っていたから少し心配だった。でも、何て言えば良いんだろう？高校生の私が体調に気を付けてとか言ったら失礼かな？どうしよう…。

「適当に休んでるからぶっ倒れたりしないよ。ありがとう。」

「…ですよね…。」

顔色読まれてしまった…侑俐さんが鋭いのか、私が判り易いのか、はたまた両方なのかな？そんな事を考えているとさっき入って来た内の1人が真顔で私の両手を握って言った。

「気を付けて！君可愛いから、きっとあっという間に狼変態のター

ゲットにされちゃうよ?!何かされそうになったら遠慮なく大声出したりするのよ?」

「はい?あ…あのー?」

誰だろう?そしてこの場合何て返せば良いんだろう?隣に居るしふぉんに縋る様に目を向けるけどしふぉんも苦笑いで首を傾げていた。よく解らないけど気を付けろって言ってくれてるんだよね?

「おっ待たせしましたぁー!」

甲高い声と共にかなり勢い良くドアが開いて佐藤さんが現れた。この人のテンションっていつ下がるんだろう?興味無いけど下がった所は見てみたい気がする。と言うかむしろ、下げて欲しい。後に続く形で数人の男の人が入って来た。…ん?何か、皆さん…疲れてる?

「七海君大丈夫?!どうしたの?!その傷!」

しふぉんが心配そうに七海さんに駆け寄った。見ると確かに傷だらけだった。

「実は今まで男性陣にはテストを受けて貰っていました。お姫様を護る為には強くないといけないって事ですね。」

「喧嘩でもしたんですか?」

「ん~まぁ、そこは企業秘密。――で、本題はここから。七海君、説明した通りに出来るわね?」

皆の視線が一斉に七海さんに向けられた。一部では楽しげにクスクスと笑っているみたい。七海さんは悔しそうに頭を掻くと、意を決した様に傍に立っていたしふぉんの手を取り、その唇に寄せた。

「なぁっ?!なななななな…七海君?!」
「…コードネーム『ＣｒａｚｙＲａｂｂｉｔｓ』七海拓十…今この時より俺がしふぉんを守る。」
「ふぇっ?!」

その言葉に一瞬部屋がシンと静まり返った。

「七海君上出来でぇっす。では『∞』データテスト、只今よりスタートでーす。」
「えっ…えぇっ?!」

それはあまりに唐突に始まった。

22．一直線なボケ

王子様ちっくな爆弾発言と、花一匁みたいなパートナー選び、そして人間関係のゴタゴタ…実に実にペンが進む状況に思わず顔がにやけてしまいそうだった。新しいメモ帳とスケッチブックが必要かも、なんて通路を歩きつつ頭の中で計算していると、傷だらけの拓十君が横切った。

「不本意且つ屈辱～って所かな？ウサギさんは。」

「またアンタかよ…つか、皆どうな訳？こんなふざけた遊び正気じゃねぇだろ、倉式は相変わらず俺の事目の敵だし。」

ぶつぶつと文句を言いながら苛立たしげに自販機のスイッチ連打。なかなか理想的な天然っぷりはキャラとしては美味しいのかも知れないけど…。

「君確かに不快だね、緋織ちゃんが目の敵にするのも解る気がする。」

「なっ…？！俺が何したって言うんだよ？！」

手帳に一挙一動をメモしつつ話し掛ける。くるくると判り易く変わる態度は私のペンを飽きさせない。手にした缶珈琲を開けもせず、矛先が変わったと言わんばかりに不機嫌そうな顔と声を向けた。

「緋織ちゃん可愛いでしょう？スタイルも良いし、それに成績も良くて、でも悪びれてなくて。」

「何が言いたい訳？見習えとでも？」

当然の様に怒る、そして考えようとはしていない。無神経且つ単純、

怒るのも無理は無い。緋織ちゃんも、そして私も。だからかな？私のペンも言葉も止まらない。

「女の子がふわふわのんびりしてる生き物だとでも思ってる？何でも揃ってる子が平穏無事に暮らせると？現実なんて残酷でしか無いの、ちょっと可愛ければ僻まれて、何をやっても出る釘さながら叩かれて、否応無しに宝物を粉々に砕かれて孤独の真ん中に放り投げられて、でも誰も助けてくれず、強くなるしか生きていく方法は無いの。」

苛立っていたであろう拓十君はどんどん視線を泳がせた。何か言おうとしてるけど言葉が出て来ない感じが見て取れる。１６歳に解れって言うのは酷かしら？でも子供だからって何かあってからじゃ遅い。

「そんな地獄みたいな中で友達が居るのは奇跡みたいな物よ、あの子の場合はそれがしふぉんちゃん。解る？うさぎさん。君がふがいないとしふぉんちゃんが危険な目に遭うかも知れないって事。悪いけど私だって大事な大事な宝物を今の君に預けたくはないかなぁ？君弱いもん、心身共にね。」

飲む気配が無い缶珈琲を取り上げて、俯いて唇を噛み締める拓十君を背にラウンジに向かって歩いた。不意を突く様に斜め後ろから声がした。

「坊や相手に容赦無いな、鶴村。」

「変態さんに言われたくないかも。正直君のやり方も微妙に萌えないのよね…天城会長。」

「面倒な相手に声高に好かれてる女はいじめる気にならないだろうと言ったのはお前だぞ？鶴村。」

面倒な相手って言うのは敵に回したくない有能なタイプ、ってつもりで言ったんだけど、こんな一直線なボケだって知ってたら考えたかも。盛大に人選ミスッた感。

「君違う意味でも面倒だからねぇ…出来れば眼鏡クイッな生徒会長タイプが個人的には…。」

「眼鏡？よし、帰りに眼鏡を見立ててくれ、鶴村。」

「だが、断るー。」

だってこの人勉強以外バカなんだもん。

23．雉って雑食？

佐藤さんと言い、輝詞さんと言い、他のスタッフさん達も含めてこの企画の人達は説明する前からホイホイと話を進めないで欲しい。と、私は苛立っている若葉や動揺している他の参加者の様子を見ながら思った。私もいきなりアミダくじで自分を護ってくれる人を決められては溜まった物じゃない。佐藤さんいわく今のパートナーは最初だけの物で、後から変更しても一向に構わないらしいんだけど…。

「ん？どうかした？」
「いっ…いえっ！何でも…！」

私は思いっ切り顔を逸らしてしまった。私のパートナーはこの弭さんと言う人らしい。アミダで決まったとは言え、一時的な彼氏みたいな物だし、挨拶位しないと感じ悪いのは解ってるんだけど…。

「弭、支給の鍵と携帯、お前の分。同性の番号は最初から登録してあって、異性は自分で聞けだとさ。」
「手込んでるなぁ…あ、先輩の番号あった。掛けて良い？」
「はいはい、髪を編むな。」

さっきからずーっと旋堂さんばっかり弄ってるんだよね…。鶴村先輩じゃないけどこの二人を変な目で見てしまってしょうがない。別に仲が良いだけの人達って結構居るし、髪弄ったりなんて女の子同士ならよくある事だし、あんなに綺麗で長い髪私だって編みたいし、それにしても綺麗な人達だよね、絵になる二人と言うか、顔が近くないかなとか、いや、別に顔が近いからってスキンシップの一環でよくある事だし、取り敢えずどっちが攻めでどっちが受けですかと

か考えてないです、ごめんなさい、そう言う趣味はあんまり無いけどぶっちゃけそうとしか見えませんよね、解ってやってませんか？鶴村先輩、後でその写真一枚下さい、深い意味なんて無いですよ？

「彩花ー？どうしたの？息荒いよ？」

「何でもありません…。」

落ち着け私…。

「彩花ちゃん。」

「はいぃっ！ごめんなさいぃっ！」

目の前に弭さんが身を乗り出して来て思わず裏声で謝ってしまった。吹き出して笑う弭さんに行き場の無い手と言葉が宙を彷徨った。一頻り笑った後、弭さんは支給された携帯の番号を書いてから自分の名刺を渡してくれた。

「番号間違ってないか確認して貰って良いかな？」

「あっ！は、はい！」

私は慌てて支給された携帯を操作した。自分の使っているのと機種が違って少し手間取りながら電話を掛けると、目の前で携帯が光った。

「ん、ありがと。あ、メールも番号で送れるみたいだから、何かあったら連絡して、じゃあ、宜しく。」

「よ、宜しくお願いします。」

緊張しながら頭をぺこりと下げると、持っていた携帯にメールが届いた。あれ？弭さんからだ…テストメールかな？えーっと…土曜日

…。

『土曜日暇ならデートしない？返事は今下さい　弭』

顔を上げた瞬間、人差し指が僅かに唇に触れて、金色掛かった目が薄く笑って言った。

「お返事は？」
「は、はい！」
「じゃ、土曜日宜しく。」

笑顔で頭をくしゃっと撫でると、弭さんはまた旋堂さんを弄り始めた。私はしばらくの間瞬きすら忘れる勢いで固まっていた。

24．何て言えば？

顔合わせの後会社を出ようとした所で私は日向先輩に捕まった。友達の澤田先輩が狼の毒牙に掛かりそうだとか何とか言っていたけど、要約すると隠れて澤田先輩のデートに着いて行く、と言う事だった。

「先輩…その変な眼鏡と帽子は何なんです？」
「む？ひおちゃん！尾行の基本は変装だよ？」
「余計に目立つと思うんですけど…。」

何だろう…一直線と言うか危なっかしいと言うか…大丈夫かな？この先輩。不安交じりで溜息を吐くと携帯が鳴った。私のじゃない、支給された方の携帯だ。

「ん？誰から？」
「輝詞さんですね。」
「かがし…ああ！あの玉葱みたいな色の頭の人ね！」

思わず吹き出した。た、確かに色味は似てる！あ、だめ、もう玉葱にしか見えなさそう。顔合わせの時のアミダで私の仮パートナーは輝詞さんになった。正直顔を知っている侑俐さんや先生や鷹臣さんが良かったなぁ…他の人何だか怖いし…。と、いけない、電話なんだから出ないとだよね。

「も…もしもし…？」

『今何処に？』

私は咄嗟に耳から携帯を離した。えっ？何か口調が怒ってる？何で

?!

『1人にならない方が良いって言ったと思うんですけど?』

あ…そっか、ネットに顔が出てて危ないからって言ってたっけ。心配してくれたのかな?でも1人じゃないし平気だよね。

「大丈夫です、日向先輩と一緒ですから。」

『だから、1人って言うのはそう言う事じゃ…!』

お説教されそうだったので私は電話を切ってバッグの中に仕舞った。いざと言う時は反撃だって出来るしちょっと心配し過ぎだよね。

「およ!雉鳴さん来た来た!車じゃないのね。」

「フランスから帰国したばかりで車は無いかと…。」

眼鏡と帽子を外した日向先輩が私の方を見ながらふむふむと頷いた。それから見失わない様に2人の後を尾行した。どうやら2人の行き先は数駅先の近くにある水族館らしい。と、唐突に日向先輩が口を開いた。

「そう言えばひおちゃん、あの背高い金髪の人誰?」

「ふぇっ?!」

「ほらほら、あのお姫様抱っこした人。私あんなの初めて見たもん、吃驚だったよぉ。」

思い出してまた頬がかぁっと熱くなった。鷹臣さんの事だよね?でも何て言えば良いんだろう?幼馴染?お兄ちゃんみたいな人?それとも…。

「そんなに赤くならないの。ひおちゃんがあの人だーい好きなのは解ったからさ。」

「好き…？」

ドクンと…一際大きく心臓が跳ねた気がした。

25．アウト？セーフ？

水族館を一通り見て回り、私達は館内にあるファーストフード店に入った。そこで私は思い切って聞いてみる事にした。ずっと穏やかな笑みを絶やさないこの人に。

「どうしていきなりデートしようなんて言ったんですか？雉鳴さん。」

「んー、まぁ、単に面白そうだったのと…色々試してみたくてね。」

そう言うと雉鳴さんはチラリと目線を横に送った。視線の先を向くとわたわたと隠れる若葉の姿が見えた。駅からずっと付いて来てるけど、本人はバレてないつもりなんだろうなぁ…。

「良い友達だね。ちょっと危なっかしいけど。」

「若葉はいつも一生懸命で、明るくて…落ち込んだ時も励ましてくれたり…私の自慢の友達です。」

目を細めて笑った雉鳴さんにつられて私も少し笑みがこぼれた。そんな雰囲気をぶち壊す様に携帯がヴーヴーと震えた。届いたメールにはＵＲＬがあり、その下に一言だけ書かれていた。

『サイトを見ろ』

サイトって、あのゲームのサイトだろうか？首を傾げつつＵＲＬをクリックした。能天気なキャラがぴょこぴょこするのを微笑ましく思いながらページを送って行って、ある文章に仰天した。

『現在ＭａｓｉｃＭｉｒｒｏｒとＭｏｏｎＰｒｉｎｃｅｓｓの突発

デートイベント発生中！アンケートから選ばれたお題はコレ！』

「えーっと…『姫のドジで騎士役がびしょ濡れ！そんで怒った騎士役がお仕置き…！な～んてシチュに萌えます～！』」

少し唖然としてから何となく周りを見回していて気付いた。客の数名が携帯を操作しながらこっちを見ているのだ。ピンと来た私は同じサイトの掲示板に飛んでみる。チャットの様に次から次へと書き込みが流れて行くのが見えた。結構な勢いで広まってる？！と言うかこの具体的なシチュエーションは何事？！

「お待たせ致しました、あちらのお客様からです。」

「えっ？！あの…何ですか？これ…。」

「ＸＬの水です。あ、何なら密佳特製の氷水ピッチャーなんてのも此処にありますが…。」

店員もグルですか。縋る様な思いで雉鳴さんを見ると既に呆れてげんなりしていた。と、店員のトレイから水の入ったコップを取って私に差し出した。

「はい、じゃあ頑張ってドジッ娘キャラ宜しく。」

「へっ？…や、やる気ですか？！」

「うん。」

開いた口が塞がらない…この人正気なの？大体ドジッ娘とか私のキャラじゃないと言うか、そもそも人に水掛けるドジってどう言う状況？故意にぶっ掛けるにしたって私にはそんな乱暴な事…。

「早くしろ、寸胴。」

「何ですってぇ？！」

混乱した所に罵声を浴びたもんだから、つい、うっかり、勢い余ってやってしまった。

「ピッチャーの方だし…。」

「ごごご、ごめんなさい！ごめんなさい！と、取り敢えずこれで…！」

慌ててハンカチを差し出した。と、私の唇に水に濡れた指が触れた。

「指越しってセーフかな？」

聞き返す前に唇が塞がれた。その指と、その唇で。

26．女子会

日向先輩に連れられて澤田先輩のデートを尾行して…そこで私達は何だか凄い光景を見てしまった。日向先輩の叫び声の後は正直何が何だか覚えていなくて、そして現在駅から近かったと言う理由で2人共私の家に呼ぶ事にした。

「あの、お茶です…。」

「う、うん！あの…ごめんね、急に押し掛けちゃって。」

「もぉー！何呑気な事言ってんのよ！解ったでしょ？！あの人このゲームに託けて彩花に手出す気満々なんだってば！」

私の部屋で先輩達が喧嘩されても困るんだけどなぁ…。でも、今日の事で色々解った。先ずあのサイトは私達が思っているより広まってて認知度もあるって事だ。イベントや指令みたいなのを決めてるのは多分佐藤さん達なんだろうけど、悪ノリして変な命令が出ないとも限らない。でも逆に安心した点もあった。それは『ゲームのデータテスト』と言うのを前面に出しているお陰で目立ちに目立ってる。もしイベント中に妨害目的で殴ったりしようものなら証人は幾らでもいる。それ故においそれと私達に手は出せない状況が出来上がっているという点だった。

「ひおちゃん！何か言ってやってよぉ！彩花ってばあのセクハラ野郎庇おうとしてるんだよ？！騙されてるってばー！」

「だ、だって、顔が好みで…ぐ、ぐるじい…！」

ふと見ると中々にバイオレンスな状況になっていた。後始末が面倒そうだし首を絞めるのは止めさせた。日向先輩には悪いけど私は全く別の事が気になってしょうがなかったのだ。

「あの、澤田先輩、聞いても良いですか？」
「はいはい？」
「キスって気持ち良かったですか？」

2人してお茶を盛大に吹き出してむせている。真面目に聞いたんだけどまずかったのかな…？2人の背中を両手でさすっていると、涙目の日向先輩が自分の胸をトントンと叩きつつ言った。

「ひおちゃんって、天然…？」
「いえ、そのつもりは無いですけど…私彼氏居た事もキスした事も無いからどうなのかなって思って…。」

私の言葉に2人は目を真ん丸にした。

「えぇ？！じゃあ旋堂さんは？！姫抱っことかしてたじゃない！」
「幼馴染と言うか…勿論好きですけど、子供の頃なので…。」
「そのおっぱいで色んな人を翻弄しまくってるんじゃなかったの？！」
「若葉、それじゃ緋織ちゃん只の尻軽悪女だよ…。」

若干引っ掛かったけど、大体合ってるので私はコクリと頷いた。確かに色々言って来る人やナンパは何度も遭ったけど誰かに告白されたりラブレター貰ったりは一度も…。

「ああ、生徒会長の天城先輩なら入学式の時に『その身体は危険だから俺を虫除けにしろ』って言われてぶん殴りました。」
「それは正しいわ、私あのエロキングのパートナーだけど触ったらボールペンで刺してやるつもり。」
「若葉、生徒会長に『エロキング』って…。」

漫才っぽい2人の会話を宥めつつ聞いていると放置してあった携帯が鳴った。

「あれ？睦希先輩だ。はい、倉式で…。」

『ごめんなさぁーい！！』

むしろその大声に謝って欲しいです。耳を突き破るかと思う程の大声は余裕で先輩達にも聞こえていた。2人はアイコンタクトの後携帯に耳を傾けた。睦希先輩は受話器の向こうで深呼吸を繰り返していた。

「一体どうしたんですか？」

『せ…せ…せ…！』

「せせせ？」

『旋堂さん取っちゃった…！』

「はい？」

私達は3人で顔を見合わせた。

27．修羅場を期待した

電話から３０分程経って、私の部屋は実にわいわいと賑やかになっていた。

「緋織ちゃんの家って豪邸ね～良いなぁ。」
「うっうっうっ…ごめんなさ～い。」
「鶴村さん、もう泣かないで。」

どうやら睦希先輩は軽くパニクッて参加者の女の子全員に電話やメールを送ってしまったらしい。自分の携帯に自分でメール送ってる辺り、動揺し過ぎな気もするけど、流石に放置も出来ないし、電話では埒も明かず、ついでに他の人達も話を聞きたがって、結局私の家に集合と言う事になったのだ。

「よーしよーし、萌香お姉さんが聞いてあげるから。」
「そもそも何で泣いてるの？」

涙で真っ赤になってる睦希先輩は、最早びしょびしょになったタオルで顔を拭いて、口を開いた。

「あのね…今日土曜日だったから…私本屋に行ったのね。そしたら…さ、参加者の眼鏡男子の人が金髪の女の子と一緒に居たの…。」
「眼鏡男子って誰？居たっけ？」
「あ、真壁さんでしょうか？私の仮パートナーの。」

彩矢さんの言葉にこくこくと頷くと、鞄からデジカメを出して写真を表示し始めた。皆で画面を覗き込むと、確かに金髪の女の子と私からチョコ代巻き上げた真壁さんの姿が写っている。これって盗撮

じゃないでしょうか?と言うツッコミはこの際スルー。

「それでね、私、この女の子緋織ちゃんかと思ったの。髪形似てたし…。」

自分では解らないけど、数名はなる程、と言った様子で頷いていた。

「そしたら、いきなり肩叩かれてね、ビックリして振り向いたらエロ本大量に持った旋堂さんが居たの。」

「それはどうなの?!」

「大量って…中々勇気ある行動ね…。」

休日にエロ本大量買いって…鷹臣さん、何してるんだろう。

「またデジカメ取り上げられるかと思ってね…私つい『漫画の資料集めです!』言っちゃって…まぁ正直間違ってないんだけど。…そしたら旋堂さんやけに喰い付いて来て、私の趣味とか色々　聞いて来て…。」

「腐女子に喰い付くのもどうかとは思うんだけど…それで?」

「話してる内に『試しに彼女になってみない?』って、すっごく自然な流れで言われて、つい『はい。』って返事しちゃった…。」

絶句、と言うか何も言えない…。鷹臣さんも鷹臣さんだけど、つい、でOKしちゃう先輩もどうなんだろう?

「これは祝福した方が良いのかしら?」

「でも私リア充なんてなった事無いし、緋織ちゃん交えて泥沼修羅場とか怖いし、見る分には良かったんだけど…。」

修羅場を期待されていたらしい。微妙な空気の中、ノックの音と能

天気なお母さんの声が聞こえた。

「緋織ちゃん、お夕飯出来たわよ〜？皆さんの分もあるからどうぞ〜。」

「取り敢えずご飯にしませんか？それと睦希先輩、私鷹臣さんの彼女とかではないですから、修羅場を期待されても添えません。」

「え？そうなの？ひお。」

しふぉんまで期待してたのね…。溜息と共に私は皆をリビングに誘導したのだった。

28．流暢な悪口

携帯の振動音に起こされた。まだ朝の6時過ぎで、皆まだすやすやと寝息を立てている。起こさない様にそぉっと携帯ごと廊下に出てドアを閉める。

「もしもし…？」

『お早う、我が愛しの彼女。中々名演技だったみたいだね？』

クスクスと笑う声だった。少し呆れつつ溜息交じりに返す。

「ふざけないで。話してくれる約束でしょう？それとも反故にする？桃栗みかん先生。」

少し間が空いて、それから少し下がったトーンの声で応えた。

『…降りて来て、門の前に居るから。』

電話を切って静かに階段を降りた。昨日賑やかだったせいかリビングは静まり返って無機質に見えた。玄関の扉を開けた所で人影がもう2つ…いや、性格には人影2つと毛玉2個が見えた。

「貴方は確か堇さんのブラ片手で外したホストな響さん。」

「誰に聞いたの？！」

「器用だな、お前…。」

「そう言う話しに来たんじゃないでしょう？旋堂さん。」

門の前で騒ぐといけないと言う事で毛玉…もとい犬の散歩を兼ねて

近くの公園に移動する事になった。まだ人もまばらで歩きながら欠伸が何度も出る。公園に着くと響さんは犬のリードを外してドッグランに二匹を放した。

「皆何て言ってた?」

「…反応様々。日向ちゃんはセクハラだー!って騒いでたり、先輩達は良かったねーだったり、しふぉんちゃんはキョトーンとしてたりね。」

この笑い方クセなんだろうか?顔こそ笑ってるけど、張り付いたみたいで読めない。何より解らないのは昨日本屋で会って、突然持ち掛けられた話。

「どうしていきなり彼女になれなんて言ったの?しかもあんなテンパッた芝居までさせて…それともこれも小説の取材の一環なの?」

「まさか。」

「…じゃあ、やっぱり緋織ちゃん絡み?あの子目立つし…。」

不意に伸びて来た左手にぐいっと髪を掴んで引き寄せられた。宝石みたいな緑の瞳がごく近くにある。咄嗟に飛び退こうとしたけど、いつの間にか私の後頭部をしっかり捕らえていた右手がそれを阻んだ。近くで見てもこの人は綺麗だ。金の髪と緑の瞳は、まるで人形か彫刻のそれに似てる。

「俺は今度こそ緋織を守ってやりたい…その為には手段だって選ばない。」

一瞬背筋がぞくっと冷えた気がした。冗談やハッタリじゃない。多分この人は本当に手段を選ばない。

「それと私を彼女にするのと何の関係があるのかさっぱり解らないんだけど？」

「黒髪ストレートで露出の少ない女がツボなだけだ。」

あ、この人馬鹿だ。気付いて緋織ちゃん！しかしこの近さは反則よね、幾ら中身が馬鹿だろうとこんなキラキラ星人みたいな人にホールドされたら直視出来ない。私純情ですから。キョロキョロと視線を泳がせていると、横からスッと写真を突き出され響さんの声が聞こえた。

「…日高鴇彦…2年前緋織が現行犯逮捕したストーカーの常習犯だ。」

「えっ…？！す、ストーカー？！」

都市伝説かと思っていたのにまさか実在するなんて…そして緋織ちゃんが被害者！何てお姫様な逸材！

「そ、それは大変…！じゅる…。」

「取り敢えず涎を拭け、至近距離で妄想全開されたら深刻なムードぶち壊しのドン引きだからな。大体その容姿で頭も悪くないのに盗撮と妄想が趣味と言うのは個人的にいただけないんだ。」

流暢に悪口言い過ぎ！

29．第一印象

朝の6時過ぎに手を踏まれて目が覚めた。まどろみながら目を開けると、明らかにこそこそと出て行く姿。あの子は確か昨日泣いてた睦希ちゃんよね？トイレかしら？

「ふざけないで。話してくれる約束でしょう？それとも反故にする？桃栗みかん先生。」

ドアの隙間から聞こえた声に思わず体が固まった。声自体に驚いたのも勿論だけど、問題は出て来た名前の方だった。桃栗みかん先生とは、私がまだ高校生の時夢中になった携帯小説の作者に他ならなかった。ほのぼのだったりミステリーだったりジャンルも豊富で、駅で読みながら泣いてしまった事もある。そのみかん先生が睦希ちゃんの知り合いだったなんて…。

「うーん…菫先輩…？」

「あ、ご、ごめんね緋織ちゃん、起こしちゃった？」

「あぅ～…そのチョコは私のです～…むにゃむにゃ…。」

幸いにも寝惚けていたらしい緋織ちゃんはそのまま二度寝してしまった。静かに階段を降りる音が聞こえる。え？外に行くのかしら？焦りつつこっそり後を尾ける。と、門の前に人影と子犬が見えた。…って、旋堂さんと響さんじゃないの…早朝逢引にしては響さんと子犬ちゃんがお邪魔虫よね？これからみかん先生に会いに行くとか？あ、いけない見失っちゃう！角を曲がった3人を追い駆けようとした時、後ろから腕を掴まれ引っぱられた。

「尾行下手過ぎだ、家政科1年蔭澤菫。」

本気で心臓が止まるかと思った。恐る恐る振り返るとアッシュグレーの髪とサングラスが目に飛び込んで来た。

「す、すいません！今お財布持ってなくて！」

「カツアゲじゃないから。」

あれ？パッと見怖いけど普通に善い人っぽい？

「えーっと…失礼ですがどちら様で？」

「一応データテストの参加者なんだけど覚えてない？館林です。」

渡された鍵を見て記憶を辿ってみるけど、正直貧血で倒れた私は半分位しか覚えていなかった。考え込んでいると、私は3人の事を思い出して声を上げた。

「あっ！睦希ちゃん見失った！」

「この先の公園入ったよ。何かあったの？」

「えーっと、睦希ちゃんがみかん先生と話してて付いて来たら子犬が…。」

「解らないにも程がある。」

取り敢えず順を追って説明する事数分、何とか言いたい事は伝わったと思う。館林さんは呆れた様な困った様な顔で頭を掻くと携帯を取り出してメールを打ち始めた。

「込み入った話だといけないから侑俐に確認してみるよ。」

「ゆうりって誰ですか？」

「アンタの騎士役、響侑俐。流石にこっちは覚えてるだろ？」

「あ、響さんは解ります。そっか、侑俐って名前だったんですね。」

「そそ、あいつ高校時代の後輩で今ウチに犬と一緒に居候してて…。」

「同棲ですか？」

あれ、気のせいかな？館林さんが凄く残念な物を見る目でこっち見てる気がする。

「…ルームシェア。」

「そ、そうですね！ルームシェア！」

私の第一印象ってもしかしてドジ…？

30．憧れの先生が…

休日だと言うのに何故こんな朝っぱらから出掛けなきゃならないのか…侑俐に頼まれていた物を持ってのんびりと歩いていると急に侑俐から電話が掛かって来た。何で支給携帯に掛けて来るんだ?アイツは…。

「もしもし?」

「ああ、先輩。今菫さん見掛けたんですよ。尾行してるっぽいので一緒に来て貰って良いですか?公園に居ますから。」

「え?ああ、別に良いけど…。」

「どうも、それじゃ。」

礼を言うと素っ気無く電話は切れた。菫…侑俐のパートナーか、あの結構とろくさそうな…あ、居た。声を掛けようとすると向こうから話し掛けて来た。

「お帰りなさい、電話済みました?」

「えっ?」

お早う御座いますならまだしもお帰りなさいと言われる覚えは無かった。言い間違えたのか?いや、どんな間違いだ、メイド喫茶じゃあるまいし…。

「館林さん?」

「あ、いや、えーっと、侑俐から荷物持って来いって頼まれててさ。」

「何ですか?それ…糸…?」

「いや、ウィッグ。」

蔭澤はキョトンとした様子で袋の中を見ていた。此処で突っ立っているのも変なので蔭澤を促し公園へ入って行った。と、やたら目立つ金髪と黒髪が目に飛び込んで来た。

「のきゃっ?!」
「どんな悲鳴だよ…。」
「わわわ…見ちゃダメですっ！サイに蹴られます！」
「それを言うなら馬だ、それとサイなら蹴るより踏むだろ。」

馬の代わりにサイが出て来る脳も興味深い、純粋に馬鹿の可能性もある訳だが。焦る蔭澤は何故か俺の後ろに隠れて2人を見ていた。騒ぎつつ見たいらしい。

「侑俐。」
「あぁ、先輩…と、堇さん?」
「あ、お、お早う御座います！」

顔を赤らめてぺこりとお辞儀をする。何だ、満更でも無さそうだな。持って来た荷物を確認すると侑俐はそれを金髪男、もとい旋堂に渡した。

「何?ヅラ?」
「旋堂さんは目立ち過ぎますから。」
「これだけ長いと黒でも目立つんじゃ?切って染めれば良いのに。」
「そんな事したら緋織が寂しがる。」
「呆れた、その為にわざわざ?馬鹿じゃないの?みかん先生。」

何やら惚気なのか馬鹿話なのか解らない言い合いをしている。何だ、女の方鶴村だったのか。ふと横を見ると蔭澤が有り得ないほど真っ

青な顔になって居た。

「だ、大丈夫か?!」

「みかん先生が男…私の憧れのみかん先生が男…ふぅっ…。」

「わぁ?!倒れるな!!」

何なんだコイツは?!

31．キングダム没収

現在時刻朝の9時半、並木道を自転車で下っていた。世間は日曜日だが花屋である家に明確な休みは無かった。さっきの信号待ちの途中、携帯から『∞』のサイトを見ていた。ｔｗｉｔｔｅｒを含め掲示板には様々な書き込みが頻繁にある。からかう様な物から興味津々な物、苛立ちをぶつけている内容も見られる。限定で公開されていたらしい顔写真は、いつの間にかイラストと差し替えられていたが、学校の連中含めて既に広く知られている今となっては意味が有るんだか無いんだかと言った所だろう。

「痛ったぁ！！」

「え？」

直ぐ近くで声がして思わず顔を上げた。と、自転車の脇で蹲る女の子の姿があった。うっかり爪先を自転車で轢き潰してしまったらしい。

「大変申し訳ありません、ぼんやりしていて…あれ？日向若葉じゃないか。」

「何すんのよ！このセクハラキングダムバカ会長！」

俺は日向の中で知らない内に随分と出世していたらしい。しかしそんなに長くては呼び辛いのでは？第一キングダムは王国と言う意味で個人に対して使うには少々変だな。色々と考えていると日向は涙目で爪先を押さえていた。

「大丈夫か？見せてみろ。何処が痛い？取り敢えずこのサドルで良い、座って靴を脱げ。」

日向はこちらを睨んでからサドルに座り靴を脱いだ。靴下の先が赤く染まっているではないか！

「お、おい！大丈夫か?！血が…！」

「あぅ～…爪割れてるっぽい…最低…。」

何て事だ。俺は自転車で、しかも坂を下っている状態でぼんやりして日向に怪我をさせてしまったなんて…。

「日向、直ぐ病院へ！」

「はぁ?こんなの消毒して絆創膏でちょちょいっと…。」

「馬鹿！嫁入り前の体に痕でも残ったらどうする気だ?！」

「いや、バカはアンタかと。」

何て呑気な！説教をしようとしたがふとこの前の事を思い出した。日向は気が強い為に痛いのを我慢して気丈に振舞っているのではないだろうか?病院が怖くて大丈夫だと思わせているとか…。そうか、この前鶴村が言っていた『ツンデレ属性』と言う奴か、確か強がっている時は『ツン』で素直な時は『デレ』だったか。しかしこんな時位素直に痛いなり怖いなり言えば良い物を損な奴だ。溜息を吐いて日向の靴を取り上げ、サドルに座らせたまま自転車を動かした。

「ちょっ?！何処行く気よ?！靴返して！」

「病院が嫌だと言うならせめてちゃんと手当てをする。幸い俺の家はこの近くだ。」

「誰が行くか！人攫い！」

「非常時に『ツン』は止めておけ、損をするぞ日向。」

「アンタが病院行きなさいよ！このバ会長！」

怒鳴り声と共に後頭部をまた鞄で殴られた。そう言えばセクハラキングダムは没収されたらしい。

32．うっかり激痛

ズキズキと痛む爪先をチラ見しつつ、私は殆ど誘拐されるみたいにバ会長の自転車でトロトロと運ばれていた。最近冴えないなぁ…バイトだと思ってあんなテストに参加しなきゃ良かった。深々と溜息を吐いた時、自転車が止まった。

「歩けるか？」
「だから大丈夫だって言ってるのに。」
「済まなかったな…ぼんやりしてて。」

バ会長が叱られた犬みたいにしょんぼりと俯いた。わざとじゃないんだろうしそんなに気にしなくても良いのに…これじゃ私が苛めてるみたいじゃない。返す言葉に迷って視線を逸らすと、色取り取りの綺麗な花がいっぱい並んでいた。

「ここ…花屋さん？」
「ああ、ウチは祖父の代から生花店を営んでる。さっきはお得意様へ配達した帰りだったんだ。」
「ふぅん…。」

話を半分以上右から左へ聞き流しつつ花を見ていた。ウチの家族は私を含めて花を飾ったりするタイプじゃないので正直名前とかは判らない。でもキリンの形の鉢植えとか小さい花束はやっぱり可愛いと思う。

「日向、こっちに座ってくれるか？手当てをしたい。」
「自分で出来るのに…。」

諦め半分に店の奥に入って座ると、バ会長はいつの間にやら用意した救急箱から消毒液やら絆創膏やらを出していた。少し躊躇いがちに私の足に触れると、傷口を濡れたガーゼで拭き始めた。何と言うか、傅かれているみたいな体勢よね、跪いてるし女王様気分と言うか…。なんて考えていた次の瞬間、爪先に激痛が走った。

「いっ…?!いったぁ――っ!!」

電気ショックでも受けたのかと思う位だった。消毒ってこんなに沁みる物だっけ?ううん、絶対何かおかしい、有り得ない。

「あ、これキンカンだった。」

傷口にキンカンって、もう拷問の域じゃない!あぁ、もう最悪!あまりの痛みに堪え切れず涙がぼろぼろ出て来た。バ会長はキンカン持ったままオロオロと口を開く。

「す、すまん日向…その、わざとじゃ…。」

「も…帰るぅ…痛いぃ…。」

涙で視界が滲んで、よく見えないし、思考が働いてないのか何言ってるかもよく解らない。ひたすら爪先が沁みて痛い。

「ちょっとちょっとぉ?ミコちゃんってば悪い子ねぇ、何日向ちゃん泣かせてるのよ?」

「も、萌香姉?!違っ!ご、誤解で…!」

聞き覚えのある声に顔を上げようとした矢先、爪先にさっきのを上回る痛みが走った。

「ふぎゃぁあああああっ？！」
「あ…すまん足踏んだ…。」
それから私は１０分間泣き続けた。主に痛みで。

33．素直な子の育成法

泣きっ面に蜂、と言うしか無い程災難続きになってしまった日向ちゃんは１０分間泣き続けて漸く落ち着いた。それでも泣き腫らした目は兎みたいに真っ赤っかだった。ミコちゃんは流石に反省してるみたいで、さっきからずっと土下座体勢のままで居る。ちょっと踏みたいわね。

「日向ちゃん、ほらこれで顔冷やして。」
「はい…。」
「ミコちゃんも、ずっとそうしてたって何もならないでしょ？丁度ペアなんだし怪我が治る迄優しくしてあげなさい、本当にもうドジなんだから。」

ミコちゃんは何か言いたげに私を睨んでから立ち上がった。日向ちゃんの方は既に軽くトラウマになっているのかあからさまにビクッと体を強張らせていた。まぁ、怪我させられて、キンカン塗られて、靴で踏まれたらそりゃあトラウマにもなるでしょうよ。あー、見てるだけで痛いわ。と、ミコちゃんは意を決したかの如く日向ちゃんの両手を掴んで言った。

「今から怪我が治るまで俺を犬と呼べ、日向。」
「絶対に嫌。」

ツッコミ所が多過ぎて清々しい方向に育ってるわ。ちっちゃい頃は転んだり苛められたりする度にびーびー泣いて私に助けを求めて来る可愛い子だったのに。時間って残酷だわ…尤も中学に上がる頃には背とかとっくに抜かれて可愛くなくなっちゃったけどねぇ。

「ねぇ、ミコちゃん、何の本読んだの？」
「鶴村が参考になると言って大笑いで貸してくれた『僕は執事と禁忌を犯す』と言うタイトルの…。」
「読んじゃダメよ…そんな偏ってそうな本は…。」
睦希ちゃん、何て本を…今度借りよう。

「兎に角、このままでは俺の気が済まないんだ。もう直ぐ中間考査もあるし怪我のせいで成績が落ちたりしてはご両親に申し訳が立たない。」
中間考査かぁ、去年の事なのにもう受ける事は無いのよね、何だか寂しい様な新鮮な様な気分だわ。

「中…間…？」
「ああ、明日各教科の範囲発表があるだろう？」
血の気の失せた顔で日向ちゃんがミコちゃんと私をゆっくり見遣っている。え？まさか、そんなベタな展開じゃないわよね？と、明後日の方向を見ながらポツリと溢した。

「学校爆発しないかなぁ…。」
「日向ちゃん…。」
「つまりやってないんだな？よし、では明日から送迎とテスト対策もみっちり教え込むとしよう。教師陣も変わっていないし大体誰がどんな問題を出すかも予想が付く、大丈夫だ、まだ時間はある。」
「いやー！鬼ー！」
「今日の所は送って行く、ご両親に怪我させた謝罪もしたいしな。」
「絶対来るなー！！」

暴れる日向ちゃんを肩に担ぐとミコちゃんはスタスタと出て行った。
つくづく真面目な所は変わってないのねぇ…ファイト！日向ちゃん
！手を振って見送りながら気付いた。

「あ、私ジョウロ買いに来たんだったわ。」

すっかり忘れてた。

34．動揺してます

中間テストの範囲表を見ながら溜息が出た。隣ではひおがメモを取っていた。可愛くて成績良いとか神様どれだけ不公平なんだろう？

「ひおは凄いよねぇ、私歴史と物理か本当宇宙語としか思えないもん。」

「でも現国とか家庭科はしふぉんの方が全然良いじゃない。実技満点とか神レベルだよ。」

「夢はお嫁さん～。」

「じゃあ私がしふぉんお嫁に貰う～。」

ふざけ合いながら、私の心はざわついていた。どうしてひおは何でも持ってるんだろう？ふわふわの髪とか、綺麗な顔とか、勉強とか運動とか全部こなせて、助けてくれる人も一杯居て…。

「私ひおの引き立て役なの？」

私に抱き付いていた手が凍る様に固まった。一瞬頭が真っ白になって、それからハッと我に返って口を覆った。手がそっと解かれて、泣き出しそうなひおの顔が見えた。

「あ、あの！ひお、違…！」

「そんな事思ってないよ。」

「ひお…。」

「でも、ヤだったならごめんね…しふぉん。」

涙は見せなかった。凄く無理矢理作った笑顔だった。走ってくひおを夢中で追い駆けた。何度も名前を呼んで、ごめんって叫んで必死

で追い駆けた。

「きゃっ…！」

出会い頭に人とぶつかりそうになって尻餅を着いた。人が通り過ぎた時には、もうひおの姿は見えなくなってた。ぼろぼろ涙が溢れて止められなかった。何であんな事言っちゃったんだろう？ひおが私を引き立て役にしてるとか、本気で考えた訳じゃない。ただちょっと羨ましかっただけ…。

「何やってんの？そんなとこで。」

廊下にへたり込んだままでいると、頭の上から声がした。七海君だった。

「七海く…うっ…うぅっ…ひおが…ひおがぁ…。」

「喧嘩でもした？取り敢えず立て、ほら。」

伸ばされた手を取ると、ぐいっと引っ張り上げられた。ふら付きながら立ち上がると、少し心配そうに七海君が顔を覗き込んだ。ふと、手や顔に絆創膏や傷が一杯あるのに気付く。七海君こそ喧嘩でもしたんじゃないだろうか？それに、何と言うか前みたいに触るだけでおろおろしてる感じが無い。

「大丈夫か？」

「何か優しい…本当に七海君？」

「往来で座って泣いてる女にキツく当たれる程サド趣味じゃなくてね。それに、ゲームの中だけどしふぉんの事は俺が護るって決めたから。」

キザっちい台詞に思わず吹き出しそうになった。と、まだ繋いでいた手がきゅっと握られて、そのまま引き寄せられた。えっ？何これ？私七海君に抱き締められてる？！そんな！まだ早いよ！嫁入り前の１５歳！桜華しふぉんは動揺してます！

「あ…あの…？！」

「『泣いてる女は抱き締めろ』って聞いたからやってみたけど…俺が先に死にそう。」

「…何それ…でもありがと…。」

コテンと頭を胸に預けると、七海君が緊張してるのが嘘じゃないって解った。だって心音バックバクだったから。

35．好奇心の代償

何度も名前を呼ぶ声が聞こえた。何度もごめんって叫ぶ声が聞こえた。だけど止まって振り返る事が出来なかった。泣かない自信がこれっぽっちも無かったから。ひたすら走って、気付けば中庭まで来てしまっていた。狙った様なタイミングで始業のチャイムが鳴った。

「戻らなきゃ…。」

言い聞かせるみたいに呟いて重い足を引き摺る様に歩いた。いっそ医務室にでも行こうかな?頭が痛くて休んでいましたって事にして…でも先生にも迷惑掛けちゃうし、叱られるだけだよね。何やってるんだろう、私…後でしふぉんに謝ろう、冗談で言っただけかも知れないのに、私が取り乱したらしふぉんだって気にしちゃうだろうし。

「え…?」

空耳だと思った。あるいは風の音か何かかと思った。

「唄…?」

誰かの唄声だった音楽科のそれとは違う、不思議なメロディで、聞いた事も無い歌詞で、でも確かに唄だった。吸い寄せられる様にその唄声が聞こえる方へ歩いていた。どうしよう、もう教室に戻らないといけないのに、気になって仕方が無かった。辿った先にあったのは園芸科の温室だった。僅かに開いた扉をそっと開けて中を見回すと、花かと思う程真っ赤な髪が目に入った。唄を聴きたくて声を掛けられないまま立ち尽くしているとピタリと唄が止んだ。伏せて

いた緑の瞳がしっかりと私を捕らえている。怒られるかと思って後ずさりした時だった。

「あれ、唄終わり？」

「ひぃっ？！」

思いも寄らぬ方から声がして本気で飛び上がりそうになった。振り返ると温室のベンチに寝転んでいたらしいその身を起こした。

「真…壁さん…？」

「充分寝ただろ、そろそろ行く。」

赤い髪の人、一之瀬さんが不機嫌そうに立ち上がって出入り口である私の方へ歩いて来る。慌てて道を開ける。謝った方が良いかと思い口を開こうとした時、一之瀬さんは少し笑って言った。

「怒ってる訳じゃないから、そんなバンビみたいに震えなくて良いよ、響さんのお姫様。」

「え？」

聞き返す間も無くバタンと扉が閉まった。響さんって、侑俐さんの事だよね？何か聞いたのかな？それとも知り合いとかで…。

「ねぇ。」

声と壁に伸びて来た手に今度こそ背筋が凍り付いた。後ずさろうにも道を開けた結果私の後は残念ながら壁で、そこに押さえ付けられる体勢になっていた。目の前に顔があって少し怖くて顔を伏せる。

「水飲んで良い？」

「はっ？…ど、どうぞ、好きなだけ飲めば良いじゃないですか。」

何で水飲んで良いか私に聞くのよ、それもこんな体勢で。寝惚けてるとか？ビックリして損しちゃった。真壁さんはその体勢のまま私の顎を軽く持ち上げて言った。

「ごめんね。じゃあちょっと、気をしっかり持っててくれる？多分加減出来ないから。」

「え？あの、何…っ？！」

余りに突然過ぎて私は何をされているのか直ぐには解らなかった。押し退けようとした両手はあっさり捕まえられて、逸らそうとした顔は向き直されて、拒絶の言葉は飲み込まれて、何度も、何度も、何度も、いつの間にか抵抗すら忘れてしまう程彼は私の唇を奪い続けた。

36．化け物

授業が始まってしまったせいか、とても静かだった。漸く離れた唇を拭う様にツッと指が触れた。

「ごめん…。」

謝る位ならどうして?と聞く事は出来なかった。まだ少し熱を帯びた唇に手をやると、途端に唇の感触を思い出して顔がどんどん熱くなるのが自分でも解った。俯いたままズルズルとその場にへたり込む。

「ごめんってば。」

真壁さんは顔を伏せた私の髪を撫でていた。言いたい事も聞きたい事も一杯あるけど顔が上げられない。涙が出そうになるのを意地で堪えるのに精一杯だった。

「…響侑俐が好き?」

「えっ…?」

「自分の事をストーカーから護ってくれるあの人を好きになった。」

思い掛けない言葉に目を見開いていた。頭の中に何で、どうして、の言葉だけが駆け巡った。驚いたままの私を余所に真壁さんは言葉を止めない。

「だから無茶をして囮になった。」

「…めて…。」

「犯人は逮捕出来たけど、その時のショックから触れられるのが怖

くなった。」
「止めて…。」
「今は殆ど克服出来てるけどそれを報告しなかった…自分の元に繋ぎ止めたかったから。」
「止めてよ！止めて！お願いだから！」

叫んで、両手で耳を塞いだ。どうして…？何で知ってるの…？侑俐さんが話したの？ううん、違う、侑俐さんはこんな事知らない、言ってない、何より知られたくないこんなずるくて汚い私…侑俐さんにだけは絶対見せたくない！

「言わないよ、誰にも。元々そんなつもりも無い。ただ見えたから言っただけ。」
「見え…た？」
「母親曰く俺は化け物だから。」

顔を上げた先に見えたのは闇の中みたいな瞳だった。誰も見てない、何も見てない、石みたいな、氷みたいな、そんな瞳。それから何も言わず、ただ私の頭を優しく撫でていた。自分を化け物と言う真壁さんは何でか凄く悲しそうに見えて、目が離せなかった。

「…怒らないのか？」
「怒ってます…。」
「『気持ち悪い』と叫んで物を投げ付けたりは？」
「そうして欲しいですか？」

目を伏せてゆっくり首を振る。私は聞けなかった。どうしてあんな事をしたのか、どうして私の考えてる事や侑俐さんの事が解ったのか、どうして化け物なのか、どうしてこんなにも悲しそうなのか。聞けなくて、でも何か言いたくて、呟く様に私は言った。

「お水…飲みますか？」

この時私はどうかしていたのかも知れない。授業もサボって、こんな所で、会ったばかりの人にいきなりファーストキス奪われて、怒って引っ叩いて逃げれば良いのに、いつもなら絶対そうしてた。

「何で逃げないの？」

「解んないです。」

少し呆れ気味の浅い笑顔で、カチャリと眼鏡を外した。少し躊躇って、何か言おうとしたけど、何も言わないままそっと私の両頬に手を置いた。私が目を伏せるのとほぼ同時に唇が触れた。触れるだけのキスから、次第に深くなって、互いの息遣いだけが静かな温室に響いていた。

37．仔猫

放課後、私は館林先生に呼び出されていた。結局授業をサボってしまったから怒ってるんだろう。しふぉんにもまだ謝れてなくて、どんどん気持ちが沈んで行った。医務室の前で扉を開けるのを躊躇っているとこちらに来る足音があった。

「ひお…。」
「しふぉん…あ、あの…しふぉん、私…！」
「ひお～～～！」

言うが早くしふぉんが私に飛び付いて来た。泣きそうな、ううん、もう泣いてるみたいな声で何度も『ごめんね』と繰り返した。私も何度も謝った。一頻り泣き合って、謝り合って、その内何だか2人して笑ってしまった。

「え？じゃあ、しふぉんも呼び出されたの？」
「うん…ちょっと話があるからって。ひおも？」
「うん…。」

私には怒られる心当たりがあるけど、しふぉんがお説教されるなんて思えないし、一体何の話だろう？首を傾げていると、唐突に医務室の扉が開いた。一瞬驚いた私達だったが、先生はキョロキョロと辺りに人が居ないかを確認して私達2人を医務室へ招き入れた。

「どうしたんですか？先生。」
「実はなぁ…。」

先生は医務室の奥から段ボール箱を抱えてこっちへ持って来た。

「みゅ～みゅ～みゅ～。」
「仔猫だぁ！」
「かっ、かかかか可愛い～っ！」

生きたぬいぐるみみたいな仔猫が３匹、何とも愛くるしい仕草をてんこ盛りにしてうごうごしていた。しふぉんも溶けそうな顔で仔猫を撫でている。ふと見ると段ボールには『ひろってください』と歪な字が書いてあった。多分子供がお母さんにダメって言われて捨てたんだろうな…。

「職員玄関前に捨ててあって事務員に泣き付かれたんだよ。ウチは侑俐が犬飼ってるから無理だし、お前等飼えるか宛て無いか？」
「あーウチはお母さんが猫ダメです…。」
「私の家もアレルギーで…。」

手にちょいちょいとじゃれ付く仔猫を見て切なくなった。小学校の頃動物飼いたいって言ったらあっさり却下されちゃったんだよね。あの時は悔しかったなぁ…。

「だよなぁ…まぁ、何人か当たってみるか。悪かったな、わざわざ呼び出して。」
「いえ、猫可愛かったですし、それじゃあ、失礼しますね。」
「あ、ちょっと、倉式だけ追加で話が。」

仔猫を抱っこしたまま笑顔で言ったので、私は特に考えも無く残って、しふぉんは医務室を後にした。と、急に先生から笑顔が消えた。少し不安に襲われていると、先生が携帯を弄って私に見せた。

「俺宛にこんなメールが来たんだけど、どう言う事だ？」

添付されていた写真を見て凍り付いた。温室に居た私と真壁さんが写っていたから。

38．仮面教師

携帯を見詰めたまま私は言葉を失っていた。と言うか自分のキスシーン写真見せられるとか軽い拷問。冷ややかな汗と倍位の速さで耳の奥にドクンドクンと鼓動が響いて煩かった。それを打ち破ったのは先生の方だった。

「俺の与り知らぬ所で何勝手に面白そうな事になってんだよ?!」
「はい?」
「はい?じゃねぇよ!あぁ?説明しろド阿呆が!侑俐や旋堂さんならまだしも何で真壁?人工呼吸とか抜かしたら脱がすぞ!吐け!このデカ乳!」
「乳関係無いですよね?」
「まぁ、座れ。あ、珈琲で良いよな?」

先生が普段口悪いのは知ってるけど、職場である学校でこの口調はどうなんだろう?社会人として。こんな人が有能なカウンセラーとか言われてるんだもん納得行かない世の中だよね。まぁ、重々しい雰囲気で切々と説教されるより全然良いかも知れないけど。

「怒らないんですか?」
「俺が?何で?ああ、授業サボんなよって事?そこは確かに感心しないな。」

珈琲の香りがふわりと部屋に漂う。ホッとした空気の中、足元にさっきの仔猫達がすり寄って来ていた。抱き上げると私の膝の上でころころ遊び始めた。真っ白でふわふわで本当に可愛い仕草に思わず顔が緩む。お母さんがアレルギーじゃなかったらなぁ…いつか1人暮らししたら絶対ペット飼いたい。

「お前本当に隙が多いな。」
「きゃっ?!」

ごく近い声と、顔の近さに驚いた。先生は笑いながらテーブルに珈琲を1つ置いて向かいに座った。顔見知りじゃなきゃセクハラで訴えられるレベルじゃないだろうか?今更だけどこの先生をあんなテストに参加させて良いのだろうか?女の子といちゃ付いてお金貰えるならOKとか前も言ってたし、むしろ一番危ないんじゃ?あ、でもそれ言い始めたら男は皆獣とか極論になっちゃうし。あ、極論と言えば日向先輩って何であんなに男を目の敵にしてるんだろう?もしかしてツンデレ?

「で、優等生ちゃんが授業サボって温室で真壁とチューかます事になった経緯を話して貰おうか?」
「プライベートなんで。」
「話さないと今直ぐこのメールを侑俐に転送する。」

最低だ。

「…私もよく解らないんです、いきなりだったし…水飲むとか言ってましたけど。」
「水?真壁が?」

私の言葉に先生は少し眉を寄せて何かを考え始めた。そもそも真壁さんとは知り合いなのかな?最初に会った時も医務室で寝てたし、何か持病でもあるとか?それで医務室の常連だったのかな?それにしても仔猫可愛い。考え込む先生に飽きてソファの上の仔猫を弄っていると、トントンと肩を叩かれた。

「取り敢えず真壁は止めとけ。これ以上フラグ立てると面倒そうだし。」
「何ですか、急に。」
「それとは別に本題なんだが。」
「前振り長過ぎますよ。」

何故かポケットからメジャーを出して真顔で言った。

「ジャケット脱いで。」
「大声出して良いですか?」
「その大声より先に俺はさっきのメールを侑俐に…。」

日本は終わりかも知れない。

39．乱入

諦めの溜息を吐きつつジャケットのボタンに手を掛けた。クスクス笑いながら先生は片手で窓のカーテンを閉めた。

「また衣装作るんですか？」

「ん、そうそう。イベントはテスト明けの土日。」

うきうきしながら話している。と言うのも先生はかなりのコスプレ好きだからだ。見るより作って着せるのが萌えるらしい…正直よく解らないけど。でもこの外見でミシン使ってるとかギャップがあり過ぎる。

「…自分で測りますからメジャー貸して下さい。」

「駄目、ずれる、じっとして。」

「手！手がエロイです！」

手をわきわきさせて近寄るもんだから思わず後ずさる。採寸だと解ってても触られたくない！むしろ体重測られる方がマシ！絶対先生余計な所触るし！と、急に足を取られ視界が回転した。

「痛っ？！」

ゴーンと言う音と共に後頭部に衝撃が走った。後ずさる内にゴミ箱に躓き転んだらしい。しかも運悪くベッドの手摺りに頭をぶつけた。

「何か凄い音したけど大丈夫か？」

「痛たたた…。」

受身も取れずに打ったもんだからかなり痛い、うぅ、涙出て来た。
ぶつけた所を手で押さえてると先生の手がそっと触れた。私の手を退かして反対の手で頭を診ている。

「あーあー、たんこぶ出来てるぞ、何やってんだ。」
「誰のせいだと…。」
「はいはい、俺のせい俺のせい。痛いの痛いの飛んで行けー。」

笑いながら頭を撫でているとパタパタと走る音と共に医務室のドアが勢い良く開けられた。

「仔猫が居ると聞いてー！！」

私も先生もドアを開けた浅木先輩も数秒間固まってた。

「そう言う事は鍵閉めてやりなさいよ！」
「ちっ！違います！誤解です！」
「そうだぞ、普段はちゃんと鍵閉めてる。」
「ややこしくしないで下さい！」

数分の漫才に似た話し合いの後、浅木先輩は出されたホットチョコを飲んで落ち着いていた。浅木先輩曰く、帰ろうとしている所でしふぉんに会って仔猫の話を聞き、飛んで来たらしい。

「ウチの猫メスだから同じメス猫居たら引き取ろうと思って。」
「確かこいつメス、飼えるんなら頼む。」
「やーん！可愛いー！良いよ、飼う飼う。」

仔猫を満面の笑みで抱っこしてる浅木先輩を見て和んでいると、思い出した様に私に向き直って言った。

「で？さっきは何処までイベント進行してたの？チュー未遂？」
「してないですから！」
そう言う一方で私の頭の中には温室での事がぐるぐる回り続けていた。

４０．月光ならぬ蛍光灯

平日だからか今日はお客さんが少なかった。と言ってもフロアが散らかるのは毎度の事なんだけど。

「カシスー、俺ちょっと本屋寄るから先帰る。」

「うん、分かった。」

フロアの掃除を終えてロッカールームに行くと、置いてあった携帯に幾つかのメールが来ていた。友達から、お母さんから、ダイレクトメールは消去して…あれ？堇さんからだ。

「『例のサイト一体どうやって情報仕入れているんだろう？』…ん？」

今一要領が掴めずＵＲＬからサイトにアクセスしてみる。相変わらずのカブのオバケは健在みたい。更新履歴を見ると、イベントの所に『ＮＥＷ』と言うアイコンが出ていた。嫌な予感はしたけど私は特に何も無いのよね。やれやれ、と言う気持ちでクリックして仰天した。

『初デート＆指越しのキスにキュン♪』

『赤ずきんに告白？！』

『うさぎさん王子様になれるかな？』

何時の間にこんな楽しそうな事に…じゃなかった、何これ？！イラスト付きでゲームっぽくはしてあるけど本人を知ってる私にとっては思いっ切り生々しい。

「うわぁ…指越しって…殆どキスじゃない…。」

廊下を歩きながらニヤ付きそうになるのを必死に堪えてサイトを見ていると、前方にある裏口のドアがキィと音を立てて開いた。カオスかな?と思ったけど、ドアから入って来た黒くて大きな人影に直ぐ違う人だと判った。

「やっべ…!」
「ひっ…?!」

声が出なかった。喉から変な音が出ただけだった。大きな影は私を見付けると焦った様に声を上げ私の肩を乱暴に壁に押し付けた。背中を打って息が止まり何度か咳き込むと、手袋をしたままの手が私の口を覆った。

「…んでまだ人が居るんだよ…。」

苛立たしげに言った。何この人…まさか強盗?!体温が一気に下降して恐怖がドッと押し寄せた。どうしよう、どうしよう、どうしよう…!怖い…怖いよ!カオス助けて!

「ぐぇっ…!!」

カエルみたいな声と同時にいきなり身体が自由になった。スローモーションで大きな人影が無重力体験みたいに変な角度で変なポーズしてるのが見えた。と、次の瞬間には床に転がったその人の頭を靴で踏み付ける脚が見えた。

「ベタ過ぎだろ、強盗とか…ねぇ?」
「は…はひ…。」

返事も満足に出来ずへなへなとその場に座り込んだ。全身に汗が噴出して震えが止まらなかった。

「本屋で弟さんに会って、念の為迎えに来て良かったよ。立てる？」

差し伸べられた手を辿る様に顔を上げた。薄暗い廊下の蛍光灯が真っ赤な髪を照らしていた。

「一之瀬さん…！」

ホッとして、堰を切った様に涙が溢れた。警察が来るまでの間私はずっと泣き続けていた。彼の腕の中で。

41．どっきり？

悪い事をした訳じゃないけど警察署って緊張する。時々聞こえる荒い声や足音に怯えていると少し前を歩いていた一之瀬さんが無言で私に手を差し出した。さっきの事を思い出して少し躊躇っていると、少し間を置いてから手を引っ込めて、また歩き出した。忙しない部屋を過ぎて、殺風景な部屋に通される。私はつい思ったままを口にした。

「ここ取調室かしら？」

「容疑者じゃないんだから、ただのミーティングルームだよ、ほら。」

そう言って指差した先には確かに『ミーティングルーム』と書かれたプレートが付いていた。まぁ、そうか、私達犯人じゃないしカツ丼とか電気スタンド顔に当てられたりとか無いのよね。ちょっと楽しみにしてたけどそんな経験無い方が良いか。

「あー、君達？例の強盗の通報者って。」

「え…あ、あの…。」

「調書取るからさ、ちゃっちゃと質問答えて貰える？」

何？このオジサン、感じ悪い！こっち被害者なのに！ニヤ付いた中年刑事を一瞬で嫌いになってしまった。一之瀬さんは淡々と事務的に質問に答えてる。これが世に言う大人な対応なのかしら？

「えーっと、そっちのお姉ちゃんがバイト帰りで？君は心配で迎えに行ったら、容疑者が居たんで投げ飛ばした、と言うんだね？」

「ええ、そうです。」

「ふぅん…まぁお姉ちゃんもね、そんなピラピラ短いスカートなんか履いてるから、犯人刺激
しちゃうんだよ。電車の中でもそんな格好して痴漢に遭ったとか騒ぐ女の子多いんだけどねぇ…。」
「はぁ…？」

何か置いてあるコーヒーぶちまけてやりたい。何でそんな事言われないといけない訳？！どんな服来てようが私の自由じゃない！大体あの強盗が悪いのにこれじゃ私が誘ったとでも言わんばかりじゃない？！コーヒーカップを持って立ち上がろうとした時、壁をコツコツと叩く音がした。

「調書の論点がずれてますよ、吉永巡査部長。それとお忘れですか？女性に調書を取る時は女性警官を同室させる事。先月も注意した筈ですが？」
「わ、判りました…。」

私の座っている角度から声の主は見えなかったけど、口振りからして上司っぽい。

「此処は私が預かります。容疑者の聴取お願いします。」
「…ふん…所詮色仕掛けの若造が…！」

うっわぁ、あからさまな負け惜しみ！みっともなーい！吹き出しそうになるのを堪えている所にドアが開いて声の主が入って来た。

「よぉ、災難だったな2人共。」
「響さん？！」

私は素っ頓狂な声を上げていた。だって目の前に居たのが響さんだ

ったから。と言っても今はこの前みたいに派手なホスト風味の格好じゃなくて普通の白シャツとスーツなんだけど。

「…え？どっきり？」

「生活安全課特務部ストーカー対策班、班長の響侑俐と申します。改めまして宜しく。」

重厚感のある警察手帳と響さんを交互に見遣る。

「えーっと…どっきり？」

「君が俺をどう言う目で見てるか大体解った。」

このチャラい外見で警察官とか有り得ない。と言うか、無しで宜しく。

42．色仕掛け

響さんのお陰で事情聴取は直ぐに終わった。私も幾つか質問されたけど形式的な事だけだった。連絡を受けて警察に駆け付けた店長は一之瀬さんにお礼を言っていた。私の事も随分と心配してくれていた。手続きが終わって警察署のロビーに降りた時、着信やメールが一杯になってるのに気付いた。カオスからの物が殆どと、友達やテストの皆からの物もあった。連絡するのを忘れていた事を思い出して急いで電話を掛けると、カオスの怒鳴り声が耳に刺さった。怒ってて、それから凄く心配してくれたみたい。事情を話した後電話を切ってロビーのソファに座り込むと、響さんがやって来た。

「お疲れ様。一之瀬君ももう直ぐ来るから。」
「…まさか響さんが警察官だなんて思いませんでした。」
「ははは、まぁ、あんな格好だしね。あ、こんな時間だけど帰り大丈夫？送ろうか？」
「いえ、弟が迎えに来てくれるので。」
「なら良かった。」

私に缶珈琲を渡すと、少し間を空けて隣に座った。私は珈琲を啜りながらふとさっきの中年刑事が言っていた言葉を思い出した。

「そう言えば色仕掛けってどう言う事ですか？」
「んぶっ？！」

私の言葉に珈琲を吹いた響さんはゲホゲホと涙目でむせていた。直球過ぎたかしら？でも『色仕掛け』なんて聞いたら気になるし、もしかしてこの外見でお偉いさんとかを…あ、でもそれだと響きさん男女ＯＫな物凄い節操無しになっちゃう。

「…すいません、変な事聞いちゃって…。」
「いや、事実だから。」
「えっ?!」

驚いて響さんを見ると、何やら含みのある笑顔で言葉を続けた。

「『本部長の御令嬢をたらしこんで異例待遇で出世した生意気な若造』って事になってるから。」
「それって結構酷いんじゃ…?」
「そうだね。」

何か凄過ぎて冗談っぽい、むしろ冗談でからかわれてるんじゃないかしら?気まずい沈黙の中一之瀬さんがロビーに降りて来た。こちらに来るのに気付いたのか、響さんが立ち上がる。

「お疲れ、一之瀬君。」
「いえ、こちらこそ助かりました。」
「じゃ、まだ仕事なんで失礼。」

響さんは空になったらしい缶を捨てると、軽く手を振ってエレベーターに乗って行ってしまった。何だかスッキリしない。さっきのはどう言う意味ですか?なんて聞くのもどうかと思うし、あ、一之瀬さん何か知ってるのかも、警察官だって事は知ってたみたいだし。

「ねぇ、響さんって何者なの?」
「何者って…俺もよく知らないけど、何?響さんに興味あるの?」
「え?うーん…あるって言うか、謎過ぎてモヤモヤって言う感じ?ホストかと思ったら警察官だし色仕掛けとか言ってたし、それに…。」

あ、あれ?何か機嫌悪そう?私一之瀬さんに変な事言っちゃった?な、何か話題逸らした方が良いかも知れないわね。でも何言おう?響さんもそうだけど一之瀬さんも良く知らないし、何話せば良いのか解らないし、ああ～ん!もうっ!どうしたら良いのよ～?!

「…ねぇ。」
「はい?」
「俺等もデートしない?」
「はい?!」

残っていた珈琲を落として床にぶちまけたのはその2秒後の事だった。

43．交換

その日私は図書館に居た。この前授業をサボってしまったペナルティとして課題を出されていたのだ。課題と言ってもテストが近いから殆ど復習になっていて却って有難い。と、奥から話し声が聞こえて来た。

「だから、その文法だと過去形になるから…。」
「うぅ～～…、もぉヤダ、頭にキノコが生えるぅ～～…。」
「生きている人間の頭部にキノコが生えたと言う症例は無い。アレルギー性気管支肺アスペルギルス症と診断された患者からスエヒロタケやヒトヨタケの菌糸が発見された例はあるが、そもそも…。」
「うるさい！うるさぁ～い！」

いや、貴女の方が煩いですよ、日向先輩。あれじゃあ司書さんに注意され…ああ、言わんこっちゃ無い。席を立とうとした時には2人を司書さんが叱っていた。何だかんだ言ってあの2人は仲良しに見える。私のパートナーは輝詞さんだけど忙しいのかずっと顔を合わせていない。まぁ、サイトみたいなイベントが起こっても少々困るから良いけど。息を吐いて埋めた課題のプリントをまとめた時だった。

「緋織ちゃん。」
「蔭澤先輩、こんにちは。」
「こんにちは、あの…今ちょっとだけ良いかしら？」
「あ、はい？」

先輩は少し顔が強張っている気がした。怒っていると言うより、疑念を持った顔。少し人通りが少ない渡り廊下まで来ると、先輩は足

を止めて、こちらへ向き直った。

「私とパートナー交換しない？」

「へっ？！」

予想だにしなかった質問に私は変な所から声が出ていた。交換って、侑俐さんと輝詞さんをって事？飛び上がって万歳三唱したい所だけど、でも何でだろう？侑俐さんが嫌なのかな？あ、それとも輝詞さんが気になるとか？

「えっと…この前ね、ちょっとだけ緋織ちゃんの事とか、響さんの仕事の事とか聞いたの。その…日高さんって人が出所した事も。」

「あ…はい…。」

「それでね、響さん、緋織ちゃんの事守りたいから私を最優先に出来ないって、私に頭下げて謝って来て…。」

「えっ…？」

心臓が大きく跳ねて、思わず俯いた。私は何て勝手なんだろう、こんな状況で嬉しいなんて。蔭澤先輩の気持ちも考えないで二つ返事で了解したかった。でも同時に頭の半分は罪悪感で満ちた。侑俐さんは2年前の事で未だに責任を感じてる。私を襲った犯人が出所したと聞けば否が応にも私を守ろうとするだろう。侑俐さんはそう言う人だから。

「緋織ちゃん？あの…どうかな？」

何て言えば良いのか解らなかった。私は余りにも侑俐さんを縛り付けてる。私のワガママで侑俐さんを追い詰めてたら駄目…言わなきゃ…先輩にも、侑俐さんにも、私はもう大丈夫だって言って、自由にしてあげなきゃ…！

「面白そうなお話ね。」
「…っ?!…彩矢さん…?」
「私も皆さんに相談があるの、先輩と同じ内容で。」
そう言って、彩矢さんは私に携帯を差し出した。温室での私達の画像を表示させて。

４４．小さい宇宙人

全身から血の気が引いて震えが止まらなかった。何か言わなきゃ、何か言わなきゃ、と思う度に涙が零れそうになって耳鳴りがした。頭の中に嫌な思い出が次から次へと流れ込んで来て不安で一杯になった。

「緋織ちゃん。私怒ってるんじゃないんだけど。」

「…え…？」

「私別に真壁さんに興味無いし、両思いさんなら交換した方が良いかなーって思って。」

力が抜けてその場にへたり込んだ。先輩２人が驚いて心配そうに私を見てる。と、目の前に影が落ちた。

「あ、ネギさん。」

「ネギって…あの、輝詞でも飛猿でも良いのでネギはちょっと…。」

「解ってるわよ、飛猿君。」

見上げると銀緑の髪が日に透けてキラキラしていた。余程酷い顔をしていたんだろう、輝詞さんも心配そうな顔をしてる。そうだ、私この人にも謝らなきゃ…。

「ごめんなさい…。」

「えーっと？話がちょっと見えないけど…取り敢えず立てるか？」

私は頷いてゆっくり立ち上がった。それを見届けて彩矢さんがにっこり笑って言った。

「緋織ちゃん、さっきの話だけど、私は全然構わないから考えて置いて、それじゃあね。」
「私も同意見、メールや電話で相談してくれて良いからね～。」

2人が手を振ってその場を後にした直後、いきなり輝詞さんがしゃがみ込んだ。えっ?!何?!もしかして持病があってその発作とか?!少しびくびくする思いで顔を覗き込むと茹蛸みたいに真っ赤になった顔があった。

「…あのー…?」
「死ぬかと思った…。」
「はい?」
「やばかったー…。」

真っ赤になった顔を手で覆い隠して溜息を吐いた。私は少し考えてから聞いてみた。

「彩矢さんが好きなんですか?」
「んなっ…?!」

金魚の様に口をぱくぱくさせていた。2択正解。賞品、面白い顔の輝詞さん、受け取りは辞退しよう。と言うか彩矢さんが好きなんだったら交換した方が良いんだろうか?でも真壁さんとは顔合わせ辛いし、かと言って侑俐さんとも…。取り敢えず相談した方が良いよね?

「あの、輝詞さん、実は…。」
「まーまー。」
「へっ?!」

振り返ると3歳位の子供が立っていた。無邪気な笑顔で後ろから髪をツンツンと引っ張ってる。

「何その小さい生き物、隠し子？」

「ちっ！違いますよ！と言うか何処の子ですか？！迷子ですよ！えーと、ボク、お名前は？」

「あんね、ゆっちゃね、たーみときたの！いまね！おさぽなの！」

何この小さい宇宙人！誰か助けて！

45．翻訳機下さい

私と輝詞さんは小さな宇宙人…じゃなかった、小さな子を連れて取り敢えず保護者を探す事にした。しかし、この子何処の誰なんだろう？聞いてみても如何せん宇宙語にしか聞こえないし…。

「たーみは？ねぇ、たーみはぁ？」
「なぁ、さっきから言ってる『たーみ』って何なんだ？キャラか何かなのか？」
「私に聞かれても…。」
「たーみ…たーみ…うぇぇ…うぇえ～～ん！」

小さな子はとうとう泣き出してしまった。何とかあやそうとしてはみたものの、益々泣き止まなかった。泣き声を聞き付けて何人かの生徒が通ったけど保護者やそれらしい人も居ない。

「よしよし、泣かないで～…。」
「ままぁー！まーまー！たーみー！」
「何やってんの？二人共…あらあら、坊やどうしたのかな～？」
「浅木女史…子供得意？」
「保育科なめちゃいけないぜぃ？」

何だか浅木先輩がとても頼もしく見える。先輩は顔を真っ赤にして泣いている子供にしゃがみ込んで近付くと、手品の様にちっちゃなぬいぐるみを出した。

「あ！うさたん！」
「どうしたの～？ママとはぐれちゃったの～？」
「ちあうの！ゆっちゃ、たーみときたの！」

2人はぬいぐるみを通して会話してるらしい。うぅ、相変わらず何言ってるか解んない…。チラリと横を見ると輝詞さんが何とも珍しい物を見る目で2人を見ていた。こう言っちゃなんだけど『未知との遭遇』レベルだよね。感心しつつ見ていると先輩がくるりと私達を振り返った。

「ねぇ、旋堂さんに電話して貰える?私番号解らないのよ。」
「は?」
「何で鷹臣さん…ま、まさかこの子鷹臣さんの…?!」
「詳しい事は知らないわよ、でもこの子の言ってる『たーみ』って『鷹臣』でしょう?それに　緋織ちゃんをお母さんと間違えたんなら金髪に馴染みがある証拠。」

成る程、と納得した様子で輝詞さんが電話を掛けようとした時、睦希先輩に連れられた鷹臣さんがこちらに走って来るのが見えた。

「たーみ!」
「あ、鷹臣さん。」
「幸臣!」

子供はまっしぐらに鷹臣さんに飛び付いた。さっきまでは気付かなかったが2人の顔はよく似てる。もしかして本当に隠し子とか?

「良かったねー幸臣君、伯父ちゃん見付かって。」
「あ、甥っ子さんだったの?私隠し子か何かだと思ったのに。」
「幸臣は弟の子。忙しいからって幼稚舎の編入手続き頼まれたんだよ。」

鷹臣さんに肩車された幸臣君はキャッキャとはしゃいでいた。さっ

きまであんなに泣いてたのに凄い変わり様。そして何だかとっても疲れた。と、幸臣君が私を見て笑顔で言った。

「てちょ！」
「え？て、てちょ…？」
「たーみ、てちょ！たかーもの！」
「幸臣っ！」
「へぇ～そうなんだぁ。」

混乱している私を余所に何となく浅木先輩がニヤニヤしていた。翻訳機が欲しいなぁ。

46．世界がプリン

チャイムと同時に教室中から声が上がった。長かったテスト週間も今日で終わり、明日からテスト休みも入れての４連休に私はホッとしていた。と、教室にヨレヨレになったしふぉんが入って来た。

「しふぉん?!どうしたの?!」

「…幕末爆発幕末爆発…ううぅうぅ〜〜。」

あぁ、最後歴史のテストだったっけ。項垂れるしふぉんの頭を撫でていると、気のせいか周りの子がソワソワと落ち着かない。視線を辿ると廊下に七海さんの姿があった。チラチラと見られているのが気になるのか、かなり不機嫌そうだ。

「ねぇ、しふぉん、七海さんいつもあんな感じ?」

「ん〜?拓十君最近モテ期みたいですニャ〜この前もC組の子を…あいたっ?!」

「余計な事喋るな。」

あ、コツンってした、しふぉんにコツンってしたよ!この人!いつの間にか呼び方『拓十君』になってるし!何と無くだけど七海さんは最近変わった様な気がする。この前のサイトに上がってたハグとか、何気に肉食系になってる。でもしふぉんは嬉しそうだし、七海さんも満更でも無さそうだし、これはこれで良いのかも?それに引き換え、私は冴えないなぁ。交換しようかって話もなぁなぁにしてしまってるし、輝詞さんは愚か、しふぉん以外の参加者ともろくに話をしていない。こんなんじゃダメなのは解ってるんだけど、どうしても踏み込めないで居た。

「…ってば…ねぇ、聞いてる？ひお。」
「えっ？！あ…ごめん、ちょっとボーッとしてて…。」
「顔色悪いよ？寝不足？勉強で徹夜とかしたんじゃない？」
「そんなのしてないってば。」

心配するしふぉんを適当に笑って誤魔化していた。本当はあまり眠れてない。テスト勉強してたのもあるけど、ベッドに入っても色んな事を考えちゃって眠くならなかった。だけど、どうしたら眠れるのかも解らなくて、明るくなるまでひたすら勉強しては気絶する様に眠っていた。

「佐藤さんからのメール見た？」
「あー…何か『浴衣イベント』とか書いてあってよく読んでないけど。」
「ちゃんと読もうよぉ！温泉だよ？！温泉！リニューアルオープンですっごく綺麗になった旅館！」
「え…？！」

私は目を丸くした。口も開いてたかも知れない。その位驚いていた。慌てて佐藤さんからのメールを開いてみると、其処には確かに『テストプレイ参加者を温泉旅行へ御招待！』と書かれている。文面から察するにゲームのプロジェクトチームの慰安旅行を兼ねているみたいだ。

「明後日から2泊だし、この後暇なら買い物に行こうかと思って。」
「え？しふぉん、行くの？」
「ひお行かないの？タダだよ？」

ケロッとした顔で話すしふぉんの両肩を掴んで言った。

「ダメだよ！危ないよ！」
「あぅあぅあぅ世界がプリンでございます…。平気だよぉ、拓十君も行くし。」
「余計危ないじゃない！七海さんなんてきっと浴衣姿のしふぉんに理性を失って獣の如くガルルッと牙を剥くんだから！」
「おい、具体的に罵るな。」

ダメだわ、しふぉんは私が守らないと！

「しふぉん、護身グッズ買いに行こう。催涙スプレーとか弱流スタンガンとかブザーとか良い店あるから！」
「わーい、温泉だぁー。」

その後私達は七海さんと3人で買い物に出たのだった。

47．待ち合わせ場所で

温泉旅行出発の朝、緊張していたせいか予定の時間より1時間も早く着いてしまった。流石にまだ誰も来ていない。近くにあったベンチに座り、荷物の中からポケットレシピを取り出した。旅館って結構面白い創作料理とか郷土料理があるから勉強にもなるんだよね…。

「今の時期なら栗御飯と南瓜だな。」

「ひゃあっ?!…真壁さん…脅かさないで下さいよ。」

「直ぐ其処のコンビニで時間潰してたら丁度のこのこ来たからさ。」

「のこのこって…。」

笑いながら真壁さんは私の隣に座った。実はあれから顔合わせ辛くて、真壁さんのバイト先でもあるお菓子屋さんには行ってなかった。チョコはすっごくすっごく食べたかったんだけど背に腹は変えられない。何気なく隣を見るとバチッと目が合った。思わず顔ごと目を逸らしてレシピに目を落とす。

「どんだけ警戒してんの?」

「そ、そんな事は…。」

あります。物凄く警戒してます。日向先輩じゃないけど男は狼ですよね。なんて考えていると、真壁さんは視線を落としてポツリと言った。

「何か喉渇いた。」

「えっ…?」

一瞬固まった。日常会話と言われればそれまでなんだけど、残念な

がら私にはそう取れなかったから。そして真壁さんもやっぱりそう言う意味で言ってなかった事は直ぐに解った。頬に置かれた両手で。

「ふざけないで下さい。」
「…喉渇いたのは本当だけど?」
「それでも…やっぱりああ言う事は…。」

ごにょごにょと口篭った私を見て浅く笑うと、その両手はあっさり私を解放した。コンビニの袋からペットボトルを出してごくごくと飲んでいる。

「何で、その…えーっと…。」
「何でキスしたかって事?」

直球な返事にぐっと言葉を詰まらせた。また思い出して顔がカアッと熱くなるのが解った。

「したかったから。」
「んなっ?!」

一瞬引っ叩いてやろうかと思った。ふざけんなって思った。だってファーストキスだったから。でも振り上げた手は頬に触れるより先に掴まれていた。細身な外見とは裏腹に強い力で手首を握られて振り解けない。

「…やめっ…!」

指先に熱を感じた。微かな息と、唇の感触が指先から全身に走った。早鐘を打つ心臓が耳障りで悔しかった。

「光栄だね。」
「な、何がですか？」
「俺の事も考えてくれてるから。」
キャラメルみたいな瞳が目の前にあった。また逃げられなかった。
強く引き寄せる手とその唇から。

48．動悸と同期

集合場所に着いた時、時間はかなりギリギリだった。もうバスが来ていて荷物を積み込んでいるのが見えた。

「響さん、遅刻寸前ですよ？」

「済まない、急だったんで有休取るのも大変でね。」

荷物を渡して辺りを見回す、会社の人間も半分位混じっている。先にバスに乗り込んだ社員と思われる何人かがソワソワと落ち着かない、ふと見ると視線の先にはデータテストの参加者が居た。成程、確かにあの子達が集まると華やかだ。

「はいはーい、皆さん乗った乗ったー。自由席なんで適当に座っちゃって。」

役員腕章を付けた男が仕切っている。見た所俺と同じ位だろうか？年も背も。と言うかあのカフェオレみたいな薄茶頭、派手目な服、思いっ切り何処かで見た様な気がする。

「やっぽーい、久し振りー侑俐ちゃん。」

眉間に皺が寄ったまま言葉を発する事すら面倒になった。何が悲しくて大学の同期にこんな形で再会しなければならないのか、しかも俺はこのふざけた男、幸水絵眞とはあまり仲良くなかった訳で。

「乗らないならこの子食べちゃうよ？」

「ぴゃあ？！」

幸水は近くに居た緋織を脇に抱える形でひょいと持ち上げると、ジタバタする緋織を抱えたままバスに乗り込んでしまった。舌打ちをしつつ後を追うと数名が乗り込んだ後バスのドアが閉まった。

「何でお前がここに居る?」
「んー?だって俺の企画したゲームだし?」

げんなりして溜息が出た。昔から下らない悪戯に全力を注ぐ奴だった、なのに成績は常にトップ、飲み会に行けば殆ど奴のペースに巻き込まれ、うっかり呑み過ぎて酔い潰れてフルメイクされた事もあったな、それから…。

「おい、通路で立ち止まるなー。」
「ん?ああ、悪…いっ?!」

空いていた席に座ると荷物の様に緋織が此方に放られた。咄嗟に受け止めたつもりだったが右手が中々に弾力のある柔らかい部位を掴んでいた。…これ、手動かしたら泣くかな?

「セクハラ!」

後ろの座席から日向若葉の鉄拳が後頭部に飛んで来た。まだ手動かしてないだろ!…じゃない、これは不可抗力だろ!相変わらず口も手も出る子だな。

「どうだった?」
「真顔で聞かないで下さい。」
「ひおー、元気出して、キャラメルあげるから。」

いきなり何だろう?この仕打ちは…いっそ揉んどけば良かっ…いや、

それもダメか、人として。

49．最上級の感謝

疲れていたのかバスが出発して２０分程で侑俐さんは寝息を立てていた。何か、可愛い。何となく寒そうに見えたのでかける物を探していると、館林先生がジャケットを羽織らせた。

「疲れてるみたいですね。」

「ん～この馬鹿ここんとこ仕事詰めてたからな。」

と、後ろからシャッター音と共にカメラを持った睦希先輩が顔を出した。実に良い笑顔、後でその写真下さい。

「仲良しですよね～先生と響さん！」

「ん～、まぁ。けど、お前が期待してる『仲良し』とは別だぞ？」

「えー？それはそれで美味しいんですけど。」

「睦希先輩…。」

「俺がここに居るのも侑俐のお陰だから。」

そう言うと先生は服の袖を捲くった。大きな傷痕にやっぱり目が行ってしまう。詳しく聞いた事は無いけど昔の事故の痕らしい。

「高３の時事故でね。手足やられてインターハイどころか日常生活も難しくなるかもって言われた。」

「えっ…？！そ、それって、結構…かなり重傷じゃ…？」

「普通に飛び降りて死のうとしたからなー。」

けらけらと笑いながら言ってるけど私も先輩も、そしていつの間にか聞いてたらしい皆も絶句していた。空気に耐えられなくなったらしい睦希先輩が明るい声で言った。

「あ、それで響さんが励ました訳ですね?!」
「いや、コイツ開口一番罵倒したから。」
何で重傷の人にそんな事を、侑俐さん酷い。でも、ただ酷いだけだったら先生はこんなに信用してないよね?話を最後まで聞いた方が良いかも。
「『そんなミジメな姿で満足ですか?』だの『無様過ぎて引く』だのと散々言って来てなー、もう打っ殺してやろうかと思ったんだよ。」
「そ、それは、まぁ、でも…確かに。」
「そんで死ぬ気でリハビリして大分動ける様になって、ムカツクから侑俐探してたら病院の図書ルームで寝ててな。殴り飛ばそうと思って傍行ったら、本持ってたんだよ。」
「エロ本?」
「日向先輩まで…。」
日向先輩の言葉に吹き出しながら、先生は携帯に一冊の本を表示させた。タイトルからはよく解らないけど、リハビリと言う単語が見えた。
「紙がボロボロになるまでリハビリや症例回復の本読み漁ってやがった。」
「へぇ…。」
「今考えてみたら大変だったと思うけどな。言葉を選ぶ侑俐が俺怒らせる為に必死で嫌な事一杯言って、俺にわざと恨まれて…。だから感謝してる、最上級にね。」
眠ってる侑俐さんを見る先生の目はとても優しかった。顔が火照っ

て心臓がトクトクと高鳴った。

「素敵…それＨＰに更新しましょう！健気な友情！ポイント高いわ～！」

「ふぅん…そうなんだぁ…へぇ…。」

「友情萌えキャラ…いや、でも２人のラブも中々…。」

…のは私だけじゃなかったみたい。先生、なんて事を！

50．星舞祭り

バスに揺られる事数時間、旅館に着いた時はすっかりお昼になって居た。玄関は私達の他にも結構お客さんが居て受付付近がざわついている。荷物を運ぼうとした時私のお腹が盛大に鳴った。隣に居た拓十君に聞こえたらしく吹き出しそうになるのを堪えている。

「笑い過ぎっ！」

「良いんじゃない？健康で。」

拓十君はそう言ってひょいっと私の手から荷物を取り上げた。さり気なくこう言う事するとか、何か最近頼もしさがぐんぐん上がってる気がする。と、掲示板に貼ってある『星舞祭り』と書かれたポスターが目に入った。

「佐藤さん、これってお祭りですか？」

「そうよ、ちゃーんとこのお祭りに合わせるの大変だったんだから。」

「星って事は夜なんですか？」

「ええ。3日間入れ替わり立ち代りで奉納舞が続けられるお祭りでね、到る所に星のランプが掛かってて綺麗なのよ。」

星のランプなんて童話みたい、ちょっと見てみたいかも。あ、でも夜なんて私とひおだけだとダメって言われちゃうよね？酔っ払いとかに絡まれたらひおにだって迷惑掛けちゃうし。

「しふぉん、荷物置いたら昼飯だってさ。」

「あ、うん。」

呼ばれる声に我に返り慌てて小走りに着いて行く。部屋割り表を見ながら皆でエレベーターに乗り込んだ。階は皆同じで人数は結構バラバラ、私はひおとの2人部屋だった。ドアを開けると真新しい綺麗な部屋と窓の向こうに海が広がっていた

「わぁ！海！ねぇねぇ、ひお！凄いよ～！」
「本当だ～！」

2人ではしゃいでいると、私の荷物を持ったままの拓十君が零す様に言った。

「昼飯。」
「う～～、拓十君ロマンが無い～。」
「盛大に腹鳴ってた奴に言われたくない。」

もう、デリカシー無いなぁ…折角こんな綺麗な景色なのに。ちょっとふくれっ面になりつつ小さいバッグだけを持って入口に戻った。と、目の前にトン、と視界を遮る腕が置かれた。

「祭り行きたいの？」
「えっ…？」

多分ひおに聞こえないだろう、密やかな声だった。驚いて顔を見ると拓十君は悪戯っぽく笑ってて、思わず顔が熱くなった。

「行きたいの？」
「う…い、行きたい…かも…。」

何となく悔しくて俯きがちにボソボソ答えると、拓十君は耳に息が掛かる位近くで囁いた。

「じゃあ今夜ね。」
「ふえっ！？」
「顔、赤過ぎ。」

耳を押さえたまま何も言葉が出なくなった。免疫無いです１５歳、桜華しふぉんは茹ってます…。

51．ストロベリー

中々に美味しいお昼御飯の後、私達は部屋に戻って来た。３人部屋でメンバーは私、萌香さん、菫さん。同じ大学生でまとめた結果らしい。荷物をそれぞれ整理して置いてあったパンフレットなんかを眺めていると、チャイムが鳴った。

「はーい？」

「あ、あの…倉式です。ちょっと、相談したい事が…。」

意外な名前に私達はキョトンと顔を見合わせて、それから扉を開けた。するとそこには困った様子の緋織ちゃんと真っ赤な顔のしふぉんちゃんが居た。あまりに赤いので驚いて額に手を当てる。

「どうしたの？！熱あるんじゃないの？！大丈夫？！」

「カシスさ…あの…あの…。」

真っ赤な顔で今にも泣き出しそうなしふぉんちゃんにうろたえつつ、２人を部屋に通した。ソファに座って備え付けのお茶を出す。皆で心配そうにしふぉんちゃんを見ていると、緋織ちゃんが何とも微妙な表情をしている。そう言えば相談があるって言ってたけど、もしかして急病とか？

「ねぇ、体調悪いんだったら館林先生に言ってみる？お薬とか持ってるかも知れないし。」

「あのっ…！違うんです！病気とかじゃなくて！その…。」

しふぉんちゃんが発した大きな声に皆が固まった。一斉に向けられた視線に真下を向く位俯いて、今度は蚊の鳴く様な声で言った。

「…メイク教えて下さい…。」
「はい？」

それから私達は真っ赤なしふぉんちゃんを何とか問い詰め、緋織ちゃんの力も借りて情報を把握した。

「つまり、七海君とお祭りに行くのにメイクを教えて欲しい、と？」

しふぉんちゃんは真っ赤な顔をこくこくと上下に振った。と、萌香さんと菫さんが目を輝かせた。

「可愛いっ…！何この可愛い生き物！や～ん！甘酸っぱい～！」
「七海君も中々積極的ね！よし、お姉さんに任せなさい！バッチリ可愛くしてあげるから！」

それから私達は色々と打ち合わせをした。先ず夕食が終わるまでは普通に過ごし、その後で私の部屋で飾り付けよう、と言う話になった。あまり広めない様にとは思ったけど、ついついメンバーには話してしまって、夕食が終わった後の私達の部屋には女の子勢揃いとなった。

「何でこんなに…。」
「あははは…ごめん、つい日向ちゃんにバレちゃって…。」

少しおめかしなしふぉんちゃんにメイクして行く。と言っても殆ど淡いピンク中心のナチュラルメイク、下手にゴテゴテ塗るよりその方が引き立つだろうと言う結論に到ったのだ。メイクをしながらふと思った事を聞いてみた。

「ねぇ、しふぉんちゃん。」
「はい？」
「七海君の事好きなの？」
「…っ！」

真っ赤になって口をパクパクさせて、本当に金魚みたいになってから、ポソリと言った。

「わ、解んないです…でも…。」
「でも？」
「一緒に居ると、何か、この辺がギューッてなります…。」

そう言って両手を胸の前に合わせたしふぉんちゃんに、何だか私は赤くなってしまった。私だけじゃなくて皆も。理由は多分、羨ましかったから。

52．衝動

しふぉんを送った後、皆もそれぞれ自分のパートナーを呼んで星舞祭りに行こう、と言う流れになった。だけど、私は何となく行く気になれなかった。しふぉんが七海さんと楽しそうに居るのを見たら凄く羨ましくなるのが、蔭澤先輩が侑俐さんと居るのを見たら嫉妬してしまうのが堪らなく嫌だったから。部屋に戻ってからふとテーブルの上の案内状を見ると、大浴場は２４時間開いているとあった。

「折角だしね…。」

着替えと浴衣を持って大浴場に向かった。外はすっかり暗くなって、ポツリポツリと灯る明かりが蛍みたいに綺麗だった。広々とした浴場には殆ど人が居なくて、何種類かのお風呂をはしごしていた。そして数十分後、ソファに座ったまま熱くて頭がぼんやりとしていた。私一体何やってるんだろ?何でもっと皆と打ち解けられないんだろう?七海さんの事を話していたしふぉんは本当に可愛かった。真っ赤になって、ドキドキしてるのが解って、女の私から見ても可愛いなら、きっと男の人から見たらもっとずっと可愛いんだろうな。七海さんだけじゃなくて、侑俐さんだってしふぉんみたいに素直で可愛い子を好きになる。

「帰ろう…。」

色々考えてたら頭の中が嫌な事で一杯になりそうだった。折角の旅行なのに、もっと楽しまないと。そう思って立ち上がった瞬間、目の前が飴細工みたいにグニャリと歪んだ。あれ?何これ?目が回って…。

「緋織?!」

真っ暗になる直前、声が聞こえた。居る筈の無い…だけど私が一番聞きたい声だった。それからどの位経ったんだろう?目を開けた時私は部屋の中に居た。天井が見えたと思うとそっと額に手が触れた。大きくて、優しい手。

「誰…?」

何も返って来ない。侑俐さんの筈が無い。ならこれは夢?私の願望?私一体どれだけ会いたいの?

「侑俐さん…。」

貴方が好き…初めて会った時からずっと…。だけど好きになっちゃいけないって言われた。解ってる…この想いは捨てなきゃならない、侑俐さんが私の傍に居るのは私がお父さんの娘だから、仕事だから、命令だから、侑俐さんの意思じゃない、解ってる、解ってるの!頭では解ってるの!

「…好き…。」

夢の中だけで良いから言ってしまいたかった。

「侑俐さんが好きなの…。」

でないと止められなくて、押さえられなくて、苦しくて、苦しくて張り裂けそうで、涙を堪えるのに精一杯だった。その時までは。

「え…?」

突然視界に影が差して、強い力が顔を隠していた私の両手を強引に押さえ込んだ。起き上がろうとする私に覆い被さると、噛み付く様なキスが唇を塞いだ。手を振り解こうとしても指先しか動かなくて、足は膝すら曲げられなくて、悲鳴すらその唇に飲み込まれた。手が胸元から肩に滑り込んで、露になった首筋に熱が走った時、不意に携帯の音が部屋に響いた。

「――っ！？」

その音にビクッと手が止まった。目の前の影はその体で制したままの私を一瞬見下ろして、それから弾かれる様にその身を離した。動揺が空気を伝う。

「ごめん…俺…。」

肌蹴た襟元を直しながらゆっくり身を起こして、私はその名前を呼んだ。

「どうしてここに居るんですか…？真壁さん。」

53．ジレンマ

言葉も無いまま真壁さんをじっと見詰めていた。暫く視線を泳がせていたが、観念したのか少し距離を取ってベッドに座った。

「その、さっきは本当に悪かった…。」

「教えてくれませんか？」

「え？」

最初は込み入った事情とか、それこそ身の上話なんて聞くつもりは無かった。気まぐれか遊びだと思ってたから。だけど私の好奇心はそれを許さなかった。

「どうしてキスしたんですか？それも、その…何度も…。」

言いながら顔がカァッと熱くなった。だってやっぱりこんなの慣れてないし、恋愛経験だって無い。なのに殆ど会う度にキスを奪われて、気にするなって言う方が無理。

「…味覚が鋭過ぎるらしい。」

「味覚って、味の味覚ですか？」

「ん、そう。ちょっとの味で使ってる材料から状態から、果ては体調や感情まで解る。」

「あ、この前『見えた』って言ってたのは…。」

真壁さんは目を伏せてコクリと頷いた。何と無くバラバラだったピースがはまって行く。味で感情が解るなら、侑俐さんの事も、それから自分を化け物って言った事も納得が行った。勿論それは本当の事を言っている前提での話だけど。

「何で私なんですか？」
「それは…その…。」
真壁さんが言い淀んでいると、パチンと音がして室内の照明が灯った。
「そいつの話を聞く必要は無い。」
「侑俐さん…！」
私の声に侑俐さんはこっちを鋭い目で見遣った。背筋につぅっと汗が降りる。と、侑俐さんが私の手を掴んでグイと引っ張った。よろめきながら立ち上がると、そのまま私の手を引いて部屋を出て行ってしまった。足が縺れて転びそうになりながら歩いていると自分の部屋らしいドアの前で立ち止まり、鍵を開けた。
「中入って。」
「え？でも…。」
「入れよ。」
冷たい口調に体が萎縮する。侑俐さん、怒ってるよね…私がまた勝手な事して倒れたりしたから、それとも呆れてるのかな？どうしよう？怖くて侑俐さんの顔が見れない、きっと凄く怒ってる、軽蔑してる、絶対嫌われる！ぎゅっと目を瞑って俯いていると、手が近付いてくる気配がした。殴られる…！
「何された？」
「……え？」
「真壁お前に何をした？！何処に触れた？！何を言われた？！」

侑俐さんは凄く怒った顔だった。だけど何処かいつもと違う、初めて見る顔をしていた。呆けて居ると侑俐さんは私の首筋をなぞった。さっき口付けられた場所?もしかして、痕が残ってるの?やだ…見ないで!

「ふざけんなよあの野郎…!」
「侑俐さっ?!ちょ、ちょっと!侑俐さん?!何…痛っ?!やっ…痛い!」

頭を乱暴に抱かれて、首筋を吸血鬼みたいに噛み付かれた。吃驚したのと痛みで涙が滲んだ。震える肩を今度はそっと抱き寄せられる。

「痛い?」
「はい…。」
「怖かった?」
「はい…。」
「なぁ、俺の事好き?」
「はい…。」
「駄目だって解ってても、緋織は俺の事好き?」
「はい…。」

侑俐さんにしがみ付いた。色んな感情がぐちゃぐちゃに混ざってどうして泣いてるのかも解らなかった。私の体をもう一度強く抱き締めて、侑俐さんはその手を解いた。今にも泣き出しそうな顔で。

54．条件

侑俐が祭りに来ない、と言う話を聞いて何と無く嫌な予感がしていた。正確にはまずい事になっていそうな予感だ。流石に夜通し祭りに居る訳にも行かなかったので日が変わる前には旅館に戻って来たのだが…。

「なぁ、浅木、お前はどう思う？」
「緋織ちゃんがベッドで熟睡してますね。」
「で、侑俐はソファで寝てる…。」

判断に困ったので手っ取り早く2人を起こす事にした。浴衣のままの緋織が目を擦りながら体を起こした。寝ぼけているのか俺達を見て首を傾げて、それからハッと我に返った。

「…はっ！えっ？！あ、あれ？！わ、私…あ、あれ？！」
「で、これは事前？事後？」

俺の言葉に緋織は顔を耳まで真っ赤にした。と、踏んでいた足の下から声がした。

「未遂。」

深く且つ長い溜息が出た。安心なのか呆れなのか自分でも正直解らない。何気なく緋織を見直してその首筋に目が行きギョッとした。この格好で2人っきりで居てよく未遂で済んだ物だ。首をコキコキと回して侑俐が立ち上がると、気付いたのか緋織に自分のジャケットを羽織らせた。

「はぁ…何やってんだ、この据え膳娘が。」
「据え…！ち、違います！」
「緋織ちゃん、流石に私も其処はツッコみ入れるわよ。侑俐さんだって男なんだしそんなおっきな胸で浴衣肌蹴てたらそれこそ飢えた狼の前に丸々太った子羊がのこのこ出て行く様な物だから。」

やけに具体的なツッコミが少々気になったが、侑俐がソファで寝ていた辺り未遂と言うのは多分本当だろうしかしこの歯型は流石に目立つ、と言うかやけにいかがわしい。絆創膏でも厳しいし、メイクで隠すにも難しそうだ。痕は考えて付けてなんぼだろう。と言うか俺なら見える場所に痕は付けない。少し考えて荷物の中から持って来た衣装を漁った。

「取り敢えず目立つから、これ着ろ。」
「あの、コスプレ衣装持って来たんですか？」
「イベント行けなかったから…いや、それより早く首隠せ。」
「へぇ、コスプレって意外と普通なのね。」
「全部着なければインナーは普通の服と変わらないから…って、おい、衣装漁るな。」

浅木は目を輝かせて衣装を漁っていた。多分今は何を行っても聞こえないだろう。と、服を着た緋織が心配そうな顔で俺の袖を引っ張った。

「先生…。」
「そんな顔しなくても大丈夫だ、バラさないから。けど…事情知ってるんだったらあんまりこう言う事してやるな、野郎に取っちゃ拷問だからな。」

そう言うと緋織は叱られた子犬の様にしょんぼりとした。と、荷物

を漁っていたらしい浅木が何着かの衣装を手に言った。

「ねぇ、結局どう言う関係なの？」

「侑俐の上司が緋織の父親なんだよ。」

「えっ？！何そのベタなドラマみたいな設定は！」

全くその通りだと思う。俺が2年前断って侑俐に回された条件。

「18歳になるまで手を出さずに緋織を守る事。それが倉式本部長が侑俐に出した条件。」

「拷問ね。」

「全くだ。」

55．何気にチェック

響さんは緋織ちゃんと2人で話がしたいと言ったので、私と館林先生は少しの間時間を潰す事にした。と言っても今更外出する訳には行かないし、かと言ってあまり2人をそのままにして置いても良くないので温泉へ入って来よう、となったのだ。

「ぷはー！やっぱりイチゴ牛乳だよね！」
「甘そうだな。」
「えー？美味しいよぉ？ほらほら。」
「解った、解っ…ん？」

先生は何かに気付いた様にテラスを見た。外が見えるソファの1つに誰かが座っているのが見えた。

「菫？」
「え？あ、こんばんは。」
「菫ちゃんもお風呂入りに？」
「いえ、少し眠れなくて、散歩です。」

私はさっきの星舞祭りを思い出した。菫ちゃんのパートナーは響さんだけど、あの人は緋織ちゃんを優先してお祭りには来なかった。代わりに幸水さんって人が来ていたけど、人懐っこくない菫ちゃんが楽しめたとは正直思わない。そう考えると無神経な響さんに沸々と怒りが湧いて来た。

「ねぇ、菫ちゃん、響さんに文句言った方が良いんじゃない？だって勝手過ぎるわよ、放ったらかして緋織ちゃんばっかり構って、菫ちゃんに何かあったらどうするの？」

「良いんです、別に。響さんは緋織ちゃんの事守りたいって私に言ってましたし、私なんか一緒に居たってつまらないですから…。」

菫ちゃんは笑いながら今にも泣きそうだった。苛々が頂点に達して部屋に向かおうとした私の顔に水平チョップが飛んで来た。

「いったぁい?!」

「お前はもう少し考えて動け!今文句言ったら2人には逃げ場すら無くなるんだぞ?追い詰めるな!」

「だけど…!」

私達を見て菫ちゃんは訳も解らずおろおろしていた。そりゃあいきなり喧嘩したら吃驚するよね、それに館林先生の言う事も尤もだ。今響さんと緋織ちゃんを責めたら確かに八方塞がりになっちゃう。私が落ち着いたのを見計らって館林先生は大きく溜息を吐いた。菫ちゃんを見ながら何やら考えているみたい。と言うか上から下まで舐める様に見ていたので思わず眉間に皺が寄った時だった。

「エメラルダ…。」

「はい?」

「大丈夫、見た所84.55.88って所だろ、入る入る。じゃあ行こうか。エメラルダなら別室に預けてる。」

「えっ?えっ?あの…ちょっと?!」

何やら訳の解らない単語を並べると菫ちゃんの手を掴んでスタスタと歩き出してしまった。慌てて後を追い駆けながら話す。

「何処行くの?ねぇ。」

「こう言う時はパーッと衣装でも着て気晴らしに限る。」

「い、衣装?!」

「それ単なる趣味じゃ…？」
「無論だ。」
呆れ半分に私は館林さんについて行った。多分元気付けようとはしてるんだろうけどね…。

56．戦利品

窓から差した朝日が眩しくて目が覚めた。まだボーッとしてる頭で起き上がった時、手にサラサラした物が触れた。何これ？取り敢えずなでなでなで…と。

「んー…？もう朝…？」

サラサラした物はだるそうな声と共にむくりと体を起こした。色素の薄い髪が日に透けてキラキラしてる。そこで初めて私の思考は戻った。

「お早う、睦希ちゃん。」

「にゃぁああっ？！何故寝起きに雉鳴さん？！これは何事？！若さゆえの過ち？！」

「服着てるでしょ、それにこの状況で手出せたら勇者だから。」

言われて辺りを見回すと、衣装やジュース缶でとっ散らかった大部屋が見えた。他のメンバーも座布団迄使った雑魚寝状態。確かにこの状態では手出すのは至難の技。

「あ、そっか、昨日何故かコスプレ宴会になったんだっけ。」

お祭りから帰って部屋で寝る仕度をしていた時、内線で呼び出されて宴会に使うここの大部屋に来た。衣装の出所はイベントがフイになった館林先生だったみたいだけど、テンション上がってたせいかフャッションョーから宴会になったんだよね。

「うー…頭痛ェ…。」

「お早う、鷹臣さん。」
「わお、新撰組。」

頭を押さえながら旋堂さんが起き上がった。少し崩れた黒髪のウィッグ、寝ぼけてるのか無防備な顔、回してる首より肌蹴た着物から覗く鎖骨と胸元、浅葱色の羽織がこれまた良い具合にずれてる。ほぼ条件反射で高速モード16枚連写のシャッターを切ると、雉鳴さんにカメラを取り上げられた。

「あああああ!私の戦利品!返して!返して!」
「俺に無断で鷹臣さん撮らない。」
「焼き増しするから!」
「それは当然。」
「お前等…そう言う問題じゃないから。」

何とかカメラ没収もデータ消去も免れてホクホクな私に旋堂さんがポツリと言った。

「本当に好きだな、そう言うの。隠したりしないの?」
「開き直ったもん勝ち。それに、隠してて見られたりして、からかわれるのとか、もう嫌だから。」

そう、私は何も隠さないって決めた。勉強だって苦にならない、対人関係だって手の上で転がせば良い、裏切られたり、白い目で見られたり、ヒソヒソ陰口叩かれる位なら痛い子やってた方が全然楽しいもの。

「睦希。」

名前を呼ばれて振り向くより先に目の前に浅葱色が広がった。力強

い、だけど意外な程優しい腕が私を抱き締めていた。

「えっと…日向ちゃん風に言うと…セクハラ？」

「そうだね。」

「旋堂さんのロリコーンとか言われちゃうよ？」

「名前で呼んでって言ったでしょ。」

少し拗ねた言い方に思わず笑ってしまった。でもその腕が優しくて、背中越しの鼓動が心地良くて、肩に凭れた頭を撫でられてるのがこそばゆくて、そっと目を閉じてそのまま体を預けた。

「鷹臣さんのエッチ…。」

微かに笑いながら、鷹臣さんは少しだけその腕に力を込めた。

57．動けない

何だか色々あった温泉旅行も最終日、正直ちょっと回りがイチャイチャしてて鬱陶しかった。

「若葉、若葉、この近くに隠れ家的和風カフェあるんだって！」

「行かない。」

「えっ…そぉなの…？あ、じゃあこっちの和菓子の…。」

「行かないって言ってるでしょ！」

自分の声にハッと我に返った。彩花が呆然とした顔で私を見てる。何やってるの、私、これじゃ完全に八つ当たりじゃない。彩花だって、皆だって楽しんでるのに、水差してどうするのよ。

「カフェなんか言ったら真ん丸になっちゃうもん。」

「え？」

「だから！食べ過ぎて太っちゃうって言ってるの！」

ポカンとしていた彩花が吹き出して笑いむせていた。一頻り笑った後目を擦りながら彩花は言った。

「もー、若葉ってば気にし過ぎだよ、全然太ってないのに。」

「彩花は細いから言えるんだよ、旅館の料理だけでも私体重計に乗るのが怖いのに。」

「あははは、じゃあ雑貨屋通りとかは？ほら、若葉ストラップ切れちゃったって言ってたし。」

「ん、そっちなら行ってやらなくもない。」

嬉しそうに笑いながら彩花がじゃれ付いて来た。ふと横顔を見遣る

と羨ましい位キラキラして見えた。私は気に入らないけど彩花は雉鳴さんと一緒に居る様になってから毎日凄く楽しそうで、会えない日は不安げに私に電話して来たり、感情が目一杯表に出てる気がする。彩花だけじゃなくて、しふぉんちゃんや、他のメンバーにしたってそうだ。皆少しずつ仲良くなってて、いつの間にかペアの人と良い感じになってて、それが何か置いてかれたみたいで寂しかった。

「じゃあ私バッグ持って来るね、それから…。」
「彩花ちゃん。」
「あ、き…雉鳴さん…。」
「そんなにウキウキで何処行くの?若葉ちゃんとデート?」
「は、はい…あの…雑貨通り行こうかな〜って…その…。」

もじもじと赤い顔で話す彩花に何だか居たたまれなくなって、私はこっそりとその場を離れた。あんな顔の彩花見てると、私より雉鳴さんと一緒に居る方が楽しいのかなって思ってしまう。そしてそんな事を考える自分が凄く人間ちっちゃい気がして益々嫌になった。トボトボと自分の部屋に向かっていると、何処からか話し声が聞こえた。辺りを探すと非常階段の方にチラリと影が見えた。緋織ちゃんと…真壁さん?

「…だから…もう呼び出したりしないで下さい!」
「じゃあ何で来るの?嫌ならすっぽかせば良いでしょ?違う?」

吐き捨てる様に言うと真壁さんは緋織ちゃんを壁に押し付けた。2人の近さに思わず声を上げそうになって慌てて両手で自分の口を覆った。

「あんな言い方卑怯です!来なきゃ侑俐さんにバラすとか殆ど脅迫じゃないですか!」

「その首、ムカつくんだよね、あの人手出さないとか紳士的な事言っといてこんな痕付けちゃってさ、マーキングかっての、行動矛盾過ぎ。」

「放して下さい！もう止め…っ！…んっ…！」

体が動かなかった。口を覆ったままの両手が微かに震えていた。何これ…一体どう言う事なの？頭の中で情報が整理出来なくて、真壁さんに何度もキスされる緋織ちゃんを助けもしないで立ち尽くしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8640v/

いちごいちえとひめしあい

2011年10月11日12時56分発行